

女性研究者の活躍をサポート

Female Researchers



熊本大学
女性研究者
ロールモデル

熊本大学女性研究者ロールモデル

目 次

ごあいさつ					3
大学院医学薬学研究部	教 授	山 縣	ゆり子	…	4
	教 授	小 原	恭 子	…	5
	准教授	藤 田	美歌子	…	6
	准教授	友 田	明 美	…	7
	助 教	笹 尾	垂 子	…	8
	助 教	辻	真 弓	…	9
薬学部	教 授	今 井	輝 子	…	10
医学部	教 授	森 田	敏 子	…	11
	教 授	宮 里	邦 子	…	12
	教 授	上 田	公 代	…	13
	教 授	前 田	ひとみ	…	14
	教 授	山 内	葉 月	…	15
	准教授	永 田	千 鶴	…	16
	講 師	永 田	まなみ	…	17
大学附属病院	助 教	大 串	幹	…	18
	助 教	上土井	貴 子	…	19
大学院自然科学研究科	教 授	渡 邊	アツミ	…	20
	准教授	小 島	知 子	…	21
	助 教	坂 田	眞砂代	…	22
	助 教	可 児	智 美	…	23
大学院自然科学研究科附属総合科学技術共同教育センター …	准教授	岸 田	光 代	…	24
生命資源研究・支援センター	助 教	吉 信	公美子	…	25
発生医学研究センター	教 授	糸	昭 苑	…	26
	助 教	小 林	千余子	…	27
	助 教	斉 藤	典 子	…	28
文学部	教 授	積 山	薫	…	29
	准教授	木 村	博 子	…	30
教育学部	教 授	桑 畑	美沙子	…	31
	教 授	鳥 飼	香代子	…	32
	教 授	坂 下	玲 子	…	33
	教 授	袴 田	和 泉	…	34
	准教授	本 田	優 子	…	35
	准教授	八 幡	彩 子	…	36
	准教授	國 枝	春 惠	…	37
	准教授	古 田	弘 子	…	38
	准教授	河 野	順 子	…	39
	准教授	雙 田	珠 己	…	40
	准教授	飯 野	直 子	…	41
大学院法曹養成研究科	准教授	若 色	敦 子	…	42
大学院社会文化科学研究科	准教授	岩 田	奇 志	…	43
留学生センター	講 師	マスデン	眞理子	…	44
あとがき					

ご挨拶

熊本大学長 崎元 達郎



日頃より、熊本大学の男女共同参画の推進について、ご協力いただきありがとうございます。とうございます。

本学は、平成18年度から文部科学省の女性研究者支援モデル育成事業の採択を受け、「地域連携によるキャリアパス環境整備」事業を推進しております。

また、全学的に男女共同参画の推進を図るため、平成19年3月26日には「熊本大学男女共同参画推進基本計画」を策定いたしました。

上記事業の一環として、今年度は、「女性研究者のロールモデル誌」を作成することといたしました。平成20年5月現在、本学の女性研究者は、121人で全体の13%であります。その中から、41人名の方にご参加いただきました。

この冊子は、若手女性研究者や研究者を希望する女子学生に対し、本学の先輩研究者のキャリアパスや研究の状況等に関する情報を提供することにより、研究を継続する励みや研究者を目指す動機付けとすることを、大きな目的としております。

特に、本学では、女性研究者支援モデル育成事業において「チャレンジ支援」を重要な課題の一つに設定し、次世代を担う優れた女性研究者の参入を促進することや、育成された優秀な女性研究者が、多様な場で活躍できるようキャリアパスの創出に努めております。

今回、参加いただいた女性研究者41名には、お一人ひとりの、学生から、ポスドクなどを経て、研究職に就くまでの、多種多様な課題解決や、家庭と研究活動の両立、研究の師や研究成果の喜びなど、これから未来を模索している若い女性研究者や女子学生にとって大きな力をもらえる内容を盛り込んでいただきました。

多くの方が、キャリアアップやブラッシュ・アップに活用され、女性研究者をめざす方が増加していくことを願っています。



大学院医学薬学研究部

教授 **山縣ゆり子**さん
Yamagata Yuriko

●プロフィール

1975年 大阪大学薬学研究科修士課程入学
 1986年 大阪大学薬学部助手
 2001年 熊本大学大学院薬学研究科教授
 2003年 熊本大学大学院医学薬学研究部教授

立体構造が美しいタンパク質に魅せられて。

自分の仕事を持ち、その仕事を続ける

「私たちの若いころは、湯川秀樹や朝永振一郎といった科学者がいて、すごいなあ！という憧れや感動がありましたね」と語る山縣さんは、兵庫県上郡町出身。薬学部を選んだのは、友人のお姉さんが薬学部出身の研究者だったから。自分の仕事を持ち、その仕事を続けていきたい。山縣さんは考えていました。大学に入学してまだ日も浅い頃、女性教員が産休明けに保育所に子どもを預けて大学に復帰された時「そんなことが可能なんだ！」と驚き、本気で研究者を目指すようになります。修士1年時に学生結婚。当時は大学院を出てもなかなか就職のなかった時代で、男性でもオーバードクターがたくさんいました。山縣さんも就職が決まらないまま博士課程を卒業し、その後もお子さん三人を育てながら研究室に残っていました。当時は、夕方になったら子どもを保育所に迎えに行くような女性は研究室の雰囲気や乱すとして、子どもがいる女性はいないという研究室もあり、辞めていく女性たちもいました。「その点、私は研究室にも恵まれました」。家事も育児も夫と二人でこなす毎日だったそうです。しかしながら、さすがに無給で逆に授業料を払う研究生が長くなると「仕事を見つけなくては」という焦りがあったといいます。

物事は長いスパンで考える

「研究職でなくていいから就職しようか」と悩みながら4年間ほど過ごしましたが、1985年に大阪大学薬学部就職したことで、ようやく生活も安定し、長いスパンで物事を考えられるようになりました。構造生物学が山縣さんの専門ですが、この助手時代に研究テーマを決めることができました。山縣さんはDNA修復にかかわるタンパク質というものに非常に興味を持っています。「生命の中で最も働いているのがタンパク質です。遺伝子が常に保存されるのに働くタンパク質への興味は尽きません」。人で2万種類くらいあるといわれる『タンパク質の原子レベルの位置での立体構造を決める』というのが山縣さんの研究です。大量の（耳かき一杯程度のこと）タンパク質を取り出し、結晶化させ、X線を照射します（X線構造解析）。そうして立体構造を決めますが、パソコン画面で見せていただいたタンパク質の立体構造図は、とても美しいものでした。この研究から、原子レベルで薬が作用している様子、作用の仕方がわかるので、薬の開発にとっても役立つのだそうです。

理解が深まると、研究は楽しい

薬学部の学生たちが授業で簡単に「わからない」と言うことに山縣さんは危惧を感じています。「おもしろいと思ったことを続けていくこと」が研究です。「何事でも同じですが、続けていくと少しずつわかるようになり、わかってくると楽しくなります」。「今は女性男性関係なく研究成果で評価される時代になったので、それはとてもいいことです」。お子さんが成長されて、「もう、わたしはどこにだって行ける」と、2001年から単身赴任で熊本へ。家族の許へ帰るのは、月二回程度。「演劇やコンサートなど、熊本では劇場が近くにあるので、気軽に余暇を楽しんでいます。」



研究室の仲間と

大学院医学薬学研究部

特任教授 **小原 恭子**さん (感染症阻止学)

Kohara Kyouko

●プロフィール

1983年 北海道大学獣医学部卒業後、東京大学医科学研究所
 1990年 東京都臨床医学研究所
 1992年 カナダのマギール大学入学
 2000年 東京大学医科学研究所附属実験動物研究施設講師
 2005年 熊本大学大学院医学薬学研究部特任教授



高校時代から興味を持った生命科学の研究へ

(財)化学及血清療法研究所(通称:化血研)の寄付講座で、薬やワクチン開発に役立つウイルス研究をされている小原恭子さん。現在は、主に「C型肝炎ウイルスがどうして病気を引き起こすのか?」ということを知りたいために研究を続けていらっしゃいます。

高校時代から生命科学に興味を持っていた小原さんは、北海道大学獣医学部に進学します。そこで、牛の白血病ウイルスの抗体を使って研究をしました。学部卒業後、1983年に東京大学医科学研究所に入った小原さんは、山内一也教授の下でモービリウイルス研究に打ち込みます。牛痘ウイルスの遺伝子を取り出し、組換えウイルスワクチンを作るということをしていたそうです。

カナダのマギール大学へ留学

それまで非A非B型肝炎と呼ばれていた肝炎がありましたが、1989年、米国人研究者ホートン(Michael Houghton)博士らは、チンパンジーから採取された非A非B型肝炎血清から、ウイルス遺伝子を発見しました。そして、病原体の名称をC型肝炎ウイルス(HCV)とし、ここで名前が決まりました。1990年、東京都臨床医学研究所に移った小原さんは、早速、HCV研究に取り組みます。このウイルスは同定するのが難しいそうですが、遺伝子を取って同定ができるのだそうです。ここで、HCVがどんなことをやっているのか、翻訳機構研究が続きました。

1992年、小原さんはカナダのマギール大学に留学し、生化学のソネンバーク教授について2年半の研究生活を送ります。翻訳開始因子欠損マウス(ノックアウトマウス=遺伝子欠損マウス)を作り、実験研究を行いました。

科学で人を幸せにするとの思いをこめて

2000年、小原さんは東京大学医科学研究所附属実験動物研究施設講師となり、甲斐知恵子教授のお手伝いをしながら、ご自分でもHCV研究を続けていきました。

2005年に熊本大学に来てからは、HCVによる肝発癌分子機序解明への取組をスタート。世界では1億7千万人、日本では約200万人の抗体陽性者がいると推定されるHCVは慢性肝炎の主要因であり、患者は高率に肝硬変、肝臓へ移行するといわれます。日本の肝臓患者の70%以上がHCVに感染しているという現実があり、有効な治療法やワクチン開発が望まれているのです。感染者の多いエジプト(人口の15%~30%が感染しているといわれています)のスエズ運河大学との共同研究も始まっています。

小原さんは師にも恵まれたといいますが、科学は奥が深く、やればやるほど世界が広がり、問題をひとつひとつ解いていくことに達成感を感じることができる素晴らしい学問であると。「もしも科学に興味をお持ちなら、一生かけて楽しめる分野です。なぜなら、科学は人が幸せになるために生まれたものなのですから」。



学生と一緒に

科学は一生かけて楽しめる分野。



大学院医学薬学研究所

准教授 **藤田美歌子**さん
Fujita Mikako

●プロフィール

- 1985年 千葉大学理学部卒業
- 1988年 筑波大学修士課程修了
(駒相模中央化学研究所入所)
- 1993年 京都大学大学院薬学研究科入学
- 1998年 エイズウイルスの研究を始める。
- 1999年 徳島大学助手
- 2006年 熊本大学大学院医学薬学研究所助教

新しいエイズの治療法を見つけない。

一通の手紙から

藤田さんは千葉大学で化学を学びました。高校時代の化学の先生の授業がとても面白くて、その時に化学の面白さに目覚めたのだそうです。1985年千葉大学卒業後、筑波大学修士課程に入学。同大学修士課程修了後、財団法人・相模中央化学研究所に就職し、5年間、抗生物質の開発に携わりました。ここでの薬の合成の仕事が藤田さんと薬との出会いでした。そして、もっと薬について学びたいと考えようになりました。藤田さんは、京都大学大学院薬学研究科の教授に、自分が研究したいテーマを手紙に書きました。その手紙がきっかけになり、1993年、京都大学大学院薬学研究科に入学し、1996年に博士号を取得します。藤田さんはエイズウイルスがどうやって増えていくのかを学び、阻害剤の開発など、エイズウイルスの研究に入りました。1997年に東京大学医科学研究所で分子生物学を学び、1999年から7年間は徳島大学の助手として過ごしてきました。

努力すれば、道は開く

向き不向きなど考えもせずに、若いころから、研究者というものが素晴らしい職業だと思っていたそうです。京都大学院時代には生物実験をするようになり、進めば進むほどますます研究がおもしろくなっていきました。年齢とともに気負いが抜けて、「以前よりもまっさらな気持ちで、本当に研究が楽しいと思うようになってきましたね」と藤田さん。師にも恵まれ、男性研究者がほとんどの分野ですが、特にここ10年くらいは「女性だからということで、いわゆる差別的なことは全くないですね」。苦しいときがなかったわけではないけれど、「なんだか、いつも、もがいているうちに、いきなりぱっと開けるといっか抜け出ているといっか、そんな感じですね」。休日には英会話学校に通い、それが良い気分転換になっているそうです。

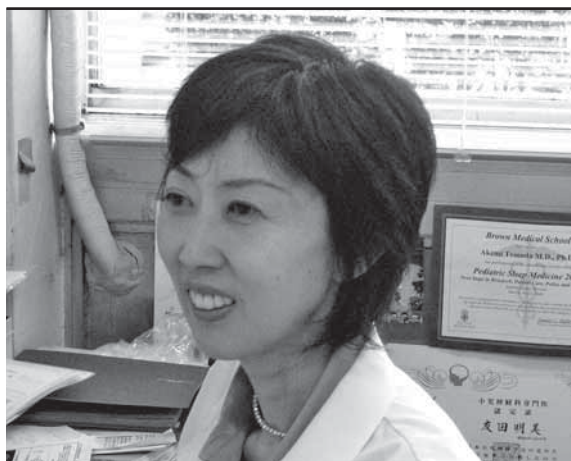
多くの命を救うために

エイズウイルスの研究が米国で始まって25年ほどになりますが、今なお世界では大勢の人たちが発症し、亡くなっているのが現状です。エイズウイルスの増殖機構の解明。エイズウイルスがどうやって増えていくのか、そのプロセスを藤田さんは研究しています。「とても競争の激しい分野なので、人のやっていないアプローチから新しいエイズの治療法を見つけない。遠くて大きい目標ですけど、それで大勢の人たちを救うことができたらいいと思います」と、真直ぐな目をしておっしゃいました。

これからもコツコツと積み上げる研究が続きます。



実験中の藤田さん



大学院医学薬学研究部

准教授 友田 明美さん

Tomoda Akemi

●プロフィール

- 1987年 熊本大学医学部卒業
- 1992年 熊本大学医学部附属病院発達小児科助手
- 2003年 マサチューセッツ州マクグリーン病院発達生物学的精神科学研究プログラムに留学。
ハーバード大学医学部精神科学教室客員助教授となる。
- 2006年 熊本大学大学院医学薬学研究部助教授

子どもの心と体はつながっている

友田さんは小児科医として、発達小児科の睡眠・メンタル・発達障害グループで治療と研究に携わりながら、小児発達社会学分野の教師も務めています。

子どもの心は大人以上に繊細で、心にストレスを受けるとそれが脳に影響を与え自律神経機能が低下しさまざまな症状を生むことが最近わかってきました。ですから「子どもの心と身体を切り離して診てはいけない」という思いが、小児科医にはあるそうです。お母さんがうつ病であったり、育児ノイローゼになった場合、赤ちゃんは笑わなくなり、あきらかに「うつ」になるそうです。また、「愛情遮断症候群」は、親から愛情が注がれなくなると成長ホルモンの分泌が止まってしまう精神および身体の発達に障害が起きる病気です。友田さんは、米ハーバード大学医学部精神科のタイチャー先生の下で2003年から3年近くにわたり、研究をされてきました。タイチャー先生が「子どもの時に激しい虐待を受けると、脳の一部分がうまく発達できなくなってしまう。そういった脳の傷を負ってしまった子どもたちは大人になってからも精神的なトラブルで悲惨な人生を背負うことになる」と話してくれたことが、友田さんにとって大きな転機となりました。

心とは脳である

友田さんが小児科医としてはじめて児童虐待の症例に遭遇したのは、1987年、某市立病院ER(救命救急センター)でのこと。瞬時に児童虐待のケースだと悟り、警察に通報したそうです。残念ながらその3歳の男児の命は救えませんでした。もし無事に救命されたとしても、発達過程の“こころ”に負った傷は簡単にはいやされません。子どもの時に、身体的虐待・ネグレクト(養育の放棄や怠慢)・心理的虐待(暴言)・性的虐待といった虐待を受けると、脳の一部分に発達障害を起こします。「心」とは「脳」であり、その影響は大人になった後も、うつ病、PTSD、あるいは解離性同一障害や境界性人格障害などといった精神疾患に発展していきます。

カンヌで賞をとった日本映画『誰も知らない』は、典型的なネグレクトの映画です。留学中にポストンで中学生のお嬢さんとこの映画を見た友田さん、ネグレクトの意識がないまま、子どもを育てている母親がいる現実を多くの人に知ってほしいと思いました。

虐待は世代を超えて受け継がれていく

これまでの研究結果からみると「虐待は世代を超えて受け継がれていく」ことも分かりました。虐待を受けた親の3分の1はわが子に虐待を行い、3分の1は自分が様々な理由から追い詰められたりした時にやはり虐待を行う。つまり、虐待を経験して大人になった親たちの3分の2がわが子に対して虐待を行うという研究結果があるといいます。これは、医療分野だけでは解決できない問題です。虐待によってストレスに弱くうつ病になりやすいといった場合でも、社会的支援が非常に厚ければ発症の可能性が減ってくる場合もあります。虐待に気づいたらすぐに相談機関へ通告すること、小学校低学年からの児童虐待教育(どんな行為が虐待なのかを教える教育)など、虐待の連鎖を断ち切るためには、医学医療分野での対応だけでなく、様々な社会的支援が必要であることは間違いありません。虐待の現場から早急に子どもたちを救い出すことで「いやされない傷」を「いやされる傷」に変えていく支援が必要だと強調されました。



私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア「虐待のメカニズムと防止の研究開発」シンポジウムにて(H20.2.10 獨協医科大学)

虐待される子どもを救い、心をいやす支援を。



大学院医学薬学研究所

助教 笹尾 亜子さん (環境社会医学)

Sasao Ako

●プロフィール

1990年 熊本大学薬学部入学

1996年 修士修了

医学部法医学教室に勤務。助手。

2003年 熊本大学大学院医学薬学研究所助手

2008年 『抗マリア薬クロロキンの法中毒学的研究』の論文で博士号を取得。

楽しみながら学びと仕事を続けられ、道は必ずひらく。

実験と研究の楽しさに魅せられて

県内で異状死体の解剖を行うのは、熊本大学だけです。笹尾さんが勤務する法医学分野では、年間130~150体の解剖があるそうです。異状死体とは明らかな病死や自然死以外の死体で、他殺・自殺などだけではなく、災害死や老人の孤独死なども含まれます。執刀は医師が行いますが、解剖所見の筆記やその後の鑑定のための各種検査が法医解剖における笹尾さんの担当業務です。

鹿児島県出身の笹尾さんは、1990年、熊本大学薬学部に入學します。大学4年生の時の講座で先輩について実験補助を経験しますが、「新しい実験結果が出るたびに、先輩がすごく嬉しそうだったんですよ」。そこで実験と研究の楽しさを知ったそうです。そんな訳で、薬理学の研究室を修士受験をしますが希望者が枠より多く、第二希望の薬品物理化学の研究室で学ぶこととなります。最初は落胆もあったそうですが、同じ経緯をたどった先輩が薬品物理化学の研究室にいて、それがまた励みにもなり、とても楽しく学ぶことが出来たそうです。



熊本県総合防災訓練にて検視部門として参加

日本の現状にあった検査キットを開発中

「薬剤師の資格もある、鹿児島に帰って就職しようか」と考えたそうですが、ある日、「あなたは研究が好きみたいだから、行ってみたら」と教授に勧められたのが医学部法医学教室での助手の仕事でした。

「でも、人間の身体について何も知らなかったんですよ」。思った以上に仕事は厳しく、何度もめげそうになりました。大学院時代の教授に相談に行くと、教授は「本当にしんどいなら、辞めたらいいよ」と、さらりとおっしゃったそうです。そうあっさり言われてみると「いや、まだやれるかも」と、元気を取り戻したといいます。「根が楽天的なんですよ」と、笹尾さん。

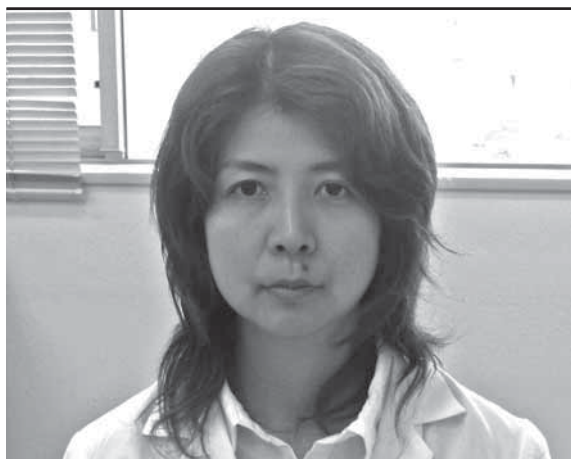
中毒死が疑われる場合には、現場で、直ちにある程度のことかわかるような尿中薬物の簡易検査キットを使用します。現在日本各地で使用されているこのキットは米国製なので、日本でよく発生する薬物中毒の実状にそぐわない部分があるといいます。このキットを「日本の薬物中毒の種類と一致したものになりたい」ということで、笹尾さんは現在、キットの開発も研究されています。

就職してしばらくは博士号をとることに迷いがありましたが、現在では「こういった仕事に就く者にとっては、博士号の取得は越えなければならないハードルなんだ」と考えるようになりました。

人生に無駄なものはありません

結婚されたばかりの笹尾さん。薬剤師をしてちゃんと食べていけるだけの生活力を持っているせいか、「同級生には独身者が多いんですよ」。出産についての考えも、非常に揺れ動くそうです。「結婚して子どもを産んでも勤められるような職場でないと、雇う側も雇われる側も困るんですけどね。この仕事は慣れるのに一定の時間がかかるんです」。ですから、研究を続けながら子どもを育てている女性たちがどんなふうに生きているのか、とても知りたいと思っています。

「失敗やうまくいかなかった経験で、役に立ってないことってありませんよね。その時は大変な思いをしても、それに意味がなかったことってほとんどありません」と、笹尾さん。「その場その場で楽しんで学んだり仕事をしていれば道はひらけていくものです」。



大学院医学薬学研究部

助教 辻 真弓さん (環境生命科学)

Tsuji Mayumi

●プロフィール

- 2001年 鹿児島大学医学部医学科卒業
鹿児島大医学部附属病院にて研修医
- 2003年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科疫学・予防医学
博士課程入学
- 2007年 熊本大学大学院医学薬学研究部公衆衛生・医療科学研究員
医学博士取得
- 2008年 熊本大学大学院医学薬学研究部公衆衛生・医療科学助教

鹿児島大学時代にロールモデルに出会う

臨床ばかりでなく他にもフィールドがあると知り、予防医学を専門に学ばれた辻さん。

学生時代に基礎医学系研究者と出会う機会は少なく、また研究職に就くのが困難であるために、医学部から研究職に行く人は非常に少ないのだそうです。辻さんの場合、知り合いの女性が基礎医学を学び研究者になったこともあって、医学部生時代から、基礎医学は割と身近な存在でした。

しかしながら、決定的だったのは、鹿児島大学時代の教授と准教授の存在でした。准教授は家庭を持ち、子どもを育て、しかも良いバランスで仕事をされている女性でした。無理をしているようには見えず、しかも良い仕事をしている女性の存在には「引っ張られました」。

辻さんは結婚し、子育てをしながら大学院で勉強を続けましたが、身体が悲鳴を上げてしまい、一時は命に係わるような状況を体験します。

娘のために小児疾患の研究を

一度身体をこわしてから、辻さんは考え方を改めます。「無理しすぎない」「自分の限界を知る」ようになり、何でも自力でやろうとするのを止めます。両親の世話になり、夫に協力してもらい、ファミリーサポートセンターにもお願いしました。6歳になるお嬢さんも含めてみんなで辻さんを支えてくれるので、「感謝しています」。また、「気分転換もうまくなりましたよ!」と、辻さん。

お嬢さんがアトピーだったのに、どこを受診するのか判断が難しいと思った辻さんは「自分で勉強するしかない」と、2002年から小児アレルギー疾患を中心に研究をされます。2005年から2年間は臨床現場においてアトピー性皮膚炎、食物アレルギーの子どもたちの診療に携わりました。2007年には学位(医学博士)を取得。2008年3月には日本衛生学会総会で研究成果を発表し、第78回日本衛生学会総会学会賞を受賞されました。

今できることをひとつずつ

熊本に帰って、辻さんは月に一度、県下の保健所の5ヶ月児検診に通っています。質問は、あせもや日焼け止めに始まり、小児アレルギー疾患の子を持つお母さんの悩みまで、それぞれ「なんでもあり」です。年齢的に変わらないので、同じ目線で話せるところが楽しく、地域とのかかわりの中で「少しでも役に立てれば」と思っています。

自分のペースで、でも、やる時はやる!

これまでの経験からも若者たちには「好きなことをして」欲しいと願っています。

失敗しても成功しても、自分で選んだことなら納得がいくから。そして自分の限界を認めることも必要で、「場合によっては、あきらめることも肝心」。そこから、別の方法を探せばいいのだとおっしゃいます。

「女性は長生きなんだから、あせらずに、今出来ることをひとつひとつこなしていけばいいのよ」という先輩医師の言葉に励まされながら、家庭と研究を大切にしています。



第78回 日本衛生学会学会賞 受賞(2008年3月)

自分のペースで、でも、やる時はやる!



薬学部

特任教授 **今井 輝子**さん (病態薬効解析学)

Imai Teruko

●プロフィール

- 1982年 熊本大学大学院薬学研究科修士課程修了後、同製剤学教室研究生になる。
- 1985年 同製剤学教室教務職員（～1999）
- 1993年 東京大学薬学部研究員（動態学・6ヶ月間）
- 1998年 アメリカ合衆国カンザス州立大学研究員短期留学
- 1999年 熊本大学薬学部特任教授

黙って見守ってくれた上司に感謝しています。

人がしないような研究を

薬の体内動態とは、体内に取り込まれた薬が目的の臓器に到達して薬効を発揮して、体外へと排出されるまでの吸収・分布・代謝・排泄の4過程を指しますが、この体内動態が原因で、薬としての開発を断念せざるを得ないものが数多くあります。今井さんはこのうちの代謝に目を付けます。代謝が原因となって予測できない体内動態や副作用を示すことがあり「理論的に酵素の特徴を調べていくことにより、もっと良い薬が出来ないか」と考え、プロドラッグ（代謝によってはじめて薬効が現れるように工夫された薬）の研究をされています。

今井さんが研究対象にしている代謝酵素（エステラーゼ）は、それほど多くの人が目につけない酵素なので、研究者は少なく、決して派手ではない研究だとおっしゃいますが、「テーマを変えることなくずっと続けてきたことで今につながりました。上司をはじめとして、環境には、本当に恵まれました」と。学会などでも、最近では「人がしないような研究を、よくやったね」と言われることがあるそうです。全ては、今井さんが学生時代からお世話になった先生方の態度によるところが大きいそうです。「自分でもそうとは知らず、当時の教授・助教授の研究に対する態度から、ひとつのテーマを多方面からじっくり見つめて研究していくことを学びました」。

薬の合成から製剤へ

大学4年生の時、ちょうど修士課程の願書を出す時期に、今井さんは突然片方の目が見えなくなります。原因はわかりませんでした。薬で回復しました。しかしながら大学院を断念し、薬剤師の資格を取り、一年間病院の薬剤師として働きますが性に合わず、「研究者になりたい」という夢を叶えるべく、熊本大学薬学研究科修士課程に進学します。

学部時代は薬の合成を学びましたが、大学院では製剤の方に入りました。合成と製剤とでは、使用する器具から異なるため、「何も知らなかった」とおっしゃいます。学部時代から製剤の勉強をしてきた周りの院生たちに聞いて教えてもらいながら「一所懸命勉強しました」。

一生と一緒に答えはひとつじゃない

今、学生たちと接していて気に掛かるのは『答え』をすぐに知りたがること。「答えはひとつじゃない」と応えると「じゃあ、どれが一番いい答えなんですか」とくる。「人生と一緒に、答えはひとつじゃないんだけどなあ」と、今井さん。

「好きなことを見つけたら、継続してやっていきなさい」ということ、また、「自分で自分の評価を決めないで」。何かがうまく出来ないと、すぐに自分にレッテルをつけてさっさと諦めてしまう若者たち。「評価なんて、他人が判断してくれることなんだから、自分からレッテルを貼らないで」。すぐに答えを出さなくてもいいのだから、自分の目の前のことにじっくり気長に向き合って欲しい、と。

朝と夜はどんなに仕事で遅くなっても愛犬との散歩は欠かさない。忙しい研究生生活を愛犬が癒してくれる。



現研究室メンバー。2008年4月天草にて。



医学部

教授 森田 敏子さん (基礎看護学)

Morita Toshiko

●プロフィール

1970年 立川病院附属立川高等看護学院卒業
 1983年 厚生労働省看護研修研究センター看護師養成所教員養成課程修了
 1983年 東京都立板橋看護専門学校教員
 1988年 玉川大学文学部教育学科(通信教育部)卒業
 1992年 岐阜大学医療技術短期大学部助教授
 1997年 佛教大学大学院教育学研究科生涯教育専攻修士課程修了
 1998年 福井医科大学医学部看護学科助教授
 2001年 熊本大学医療技術短期大学部教授
 2001年 医学博士(岐阜大学より授与)
 2003年 熊本大学医学部保健学科教授

両親の声に励まされて

全寮制の学生時代、森田さんは何度も挫折しかけました。入学直後に熊本弁を笑われたのがきっかけで、しゃべれなくなってしまったのです。おじけづき、萎縮して体を斜めに構え、しゃべらず硬い表情の森田さんを教務に呼び出した教師は、「森田さんは、いつもふてくされているように見えるけど、何か不満があるの」と切り出し、「あなたのような態度の学生は患者を受け持たせられない」と、微笑む練習をするように指導を受けました。

学習の過程でも失敗しては落ち込み、自信喪失になると、受験の時に両親から諭された「挫折しないで最後までやり遂げられるの」という母親の声と、「看護師になったとき、どんなことがあっても患者に優しく親切にできるのか」という父親の声が思い出されます。そして最後には必ず「大丈夫。あなたならやれるわよ」という母の声に励まされ支えられたのでした。

学生の目線に立って

いくつもの試練を乗り越えて、森田さんは看護師として働き出します。最初の2年くらいは失敗続きですが、4~5年程経験を積み、どのような状況の患者の看護もうまく実践できるようになり、自信もついてくるそうです。特に、学生実習がある時は、楽しくて一所懸命教えました。「教えるのが好きなんです」と森田さん。しかし、先輩看護師から「あなたは学生に警戒されている」と伝えられます。森田さんはどうしてなのかその意味がわからず、ずいぶん悩みました。そして、悩んだ末に「教え方を学ぼう」と決心します。

一年間、厚生労働省看護研修研究センターの教員養成課程で学んだ森田さんは、「自分の技術を全て教えたい」と思うあまり、実習生たちにベテラン看護師並みの高度なレベルを要求していたことに気づきます。「学生たちの目線に立っていなかったんですね。フォローもしていなかったし。学生たちにとってみたら、こわくて厳しい先輩看護師でしかなかった…」と思い至ります。

森田流幸せの見つけ方で

現在も教師である一方では学生として学ぶ日々を送る森田さんにとって、「看護教育方法」は、永遠のテーマです。「悩むことは大切だと思います。真剣に悩んだら、その先にある光もまた大きく輝くはずですから」。若い人たちには、夢と希望を持って欲しいと。なぜなら「それが、挑戦する勇気と努力による達成感を与えてくれるからです」。

「落ち込む時もあるし挫折もする」けれど、通勤の車の中で韓流ドラマのテーマ音楽を聞きながら、毎朝、幸せな気持ちで出勤。「前向きに取り組む態度を選ぶのは私」と、「森田流幸せの見つけ方」で颯爽と生活されていらっしゃるようです。



「看護情報学」の授業風景

看護教育方法は永遠のテーマ



医学部

教授 宮里 邦子さん (母子看護学)

Miyazato Kuniko

●プロフィール

NTT九州病院（現・NTT西日本九州病院）で21年間助産師として働く。

1991年 熊本県立大学文学部英文学科入学

1993年 同大生活科学部2年次に転学部

1996年 聖路加看護大学大学院入学

1998年 広島大学医学部保健学科

2004年 熊本大学医学部保健学科教授

看護師のキャリアアップのために。

充実感を味わった助産師の仕事

宮里さんはNTT九州病院の助産師でした。わき目も振らずに駆け抜けたような生活。子育てしながら、夜勤もしながらの21年間でした。「家に帰ってからも気が休まらない毎日でした。引継ぎの時に言い忘れたことがなかったかと心配になったり、あるいは気がかりな患者さんについて夜勤の看護師さんに電話を入れることも」。

けれども、辞める時はとても悩んだそうです。お産を終えたおかあさんが「次もまた宮里さんにお産をお願いしたい」と言ってくれた時の喜び。「苦しいこともたくさんあるけれど、これほどの充実感を味わうことはもうないかもしれない」と、様々な思いが交錯しました。

助産師という職業がやりがいのある仕事であり、楽しくもあったからです。

やっぱり看護しかない

育児も一段落ついた宮里さんは「もう一度、勉強がしたい。看護とは違うことを学ぼう」と決意し、1991年、熊本県立大学文学部英文学科へ進学します。

「なんでも全て自分でやってきたわけじゃないんですよ。周りのサポートがあったから、21年間続けてこられたんです。でも、子育てしながら夜勤もするということが出来たでしょう。なんだか、自信がついちゃって、何でも出来るような気がしたんですね。」

英文学を学び始めたものの、看護関係の研修会やイベントがあると知ると気になって仕方がなく、いつも参加したそうです。

2年間英文学科で学んだ後、「やっぱり自分は看護の道から離れることは出来ないのかもしれない」と、同大生活科学部2年に転学部します。

そして、看護の基盤となる社会の見方、考え方を学びます。その後、聖路加看護大学大学院に進み、研究者として看護の道へ入ることになりました。

現在、熊本大学では「疾患を持った子どもと母親（家族）との関係について」子どもと母親のその両方への支援が必要であるという視点で小児看護学の講義をされています。

ゆとりから良いケアは生まれる

看護師になって真に自立できるまで5年はかかるそうです。大学で4年間学んだ後に臨床看護師として働き始めた若者たちの大半はリアリティショックを体験するといいます。

そして理想と現実の落差に呆然とし、自信を失い、早期に仕事を辞めてしまうケースが非常に多いことを問題視しています。また、病院での看護師の勤務体制の改善も進まず、30年前とほとんど変わらない状況です。

今でも、多くの病院で日勤の仕事を終えて、その数時間後には深夜勤に出てくるなどの厳しいシフトが続いています。そういった中で多数の看護師が結婚したら仕事を辞めていくという現実。

「普通の生活が出来ないのが現状です。人間らしい心のゆとりが得られなくては、良いケアは出来ません」。

宮里さんは季刊『ナースアイ』の企画編集にも携わり、「看護師のキャリアアップと早期離職問題」といった特集を組むなど、常に身近な問題を取り上げ、看護環境の改善を目指すことにも力を注ぐ毎日です。



医学部

教授 **上田 公代**さん
Ueda Kimiyo

●プロフィール

- 1975年 平塚市民病院で看護師・助産師
- 1982年 国立公衆衛生院専攻過程看護課程修了
- 2000年 熊本大学にて医学博士の学位取得
- 2001年 熊本大学教育学部教授
- 2003年 医学部保健学科で、地域看護活動論、ライフスタイルと健康援助論等を教える。
- 2004年 熊本大学医学部教授

体のバイオリズムによって生活を変える

自分自身の身体について無関心でいられた女性でも、月経が始まったとき、多くの女性は程度の差こそあれショックを受けるものではないでしょうか。ショックを受けながらも、ほとんどの場合は毎回なんとかやり過ごしていきます。けれども、処理の仕方云々といったレベルにとどまらない、もっと踏み込んだ教育がそこでなされていたとしたら、私たちはどう感じたことでしょうか。自分自身の身体について、もっと違う受け止め方ができたかも知れません。

「毎日、ホルモンの影響を受けて生きている自分の身体をよく知ると、自ずと自分の身体に対して愛着が生まれて、気分が上向きの時、下降気味の時と、月経にあわせて生活の仕方を考えていくことができるんですよ」とおっしゃる上田さん。自分の身体をいとおしく感じるためには、自分の身体をよく知ることが大切なのだということです。

自分が発見したことを学生たちに伝えたい

この道を目指したきっかけは、友人など周囲の女性たちのほとんどが、自分の身体について悩みをもっていますが、正しい情報や対処の仕方がわからないということに気がついたからでした。5年間の臨床経験を経て上田さんは研究への道を歩み始めます。しかしながら、当時の社会状況から、研究生活を続けていくことは容易なことではありませんでした。でも、上田さんは諦めませんでした。それは、「教育には様々な方法論があるけれども、自分自身が研究し見出したことを、学生たちに伝えたい」という強い気持ちがあったからです。現在、上田さんは地域看護活動論、健康教育論などの講義を持っています。

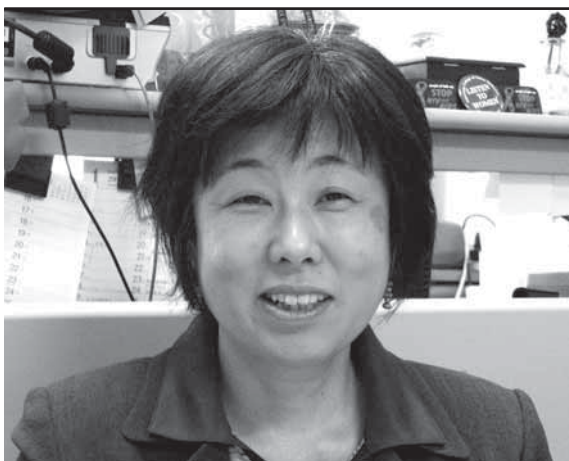
研究はコツコツと積み上げていくこと

自分らしい健康生活を迎えるために、私たちには何が出来るのか。「健康の出発点はおなかの中の赤ちゃんからである」と、上田さんは考えています。そして、2000年以降の研究テーマが低出生体重児研究です。『低出生体重児に及ぼす地域環境の影響』というのが研究課題ですが、2003年には『熊本県における低出生体重児発生率の動向とそれに関与する産科要因および地域要因の変遷（共著）』を発表しています。がん、脳卒中、心臓病といった三大生活習慣病の予防にもつながるといふ低出生体重児研究。「低出生体重児の研究を通して、予防できるよう生活の支援方法を導きだしていきたい」と、まだまだこれからライフワークとしてこの研究を続けていくそうです。研究者として最も大切なことは？という質問に、「コツコツと積み上げていくこと。研究者とはいつも向上心を持って学び、いつも考え続けることが大切です」。上田さんはきっぱりとおっしゃいました。



研究室で

身体を究めると身体がいとおしくなる。



女性研究者ロールモデル

医学部

教授 前田ひとみさん (基礎看護学)

Maeda Hitomi

●プロフィール

- 1981年 熊本大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程卒業
同課程教務員、5月より同大医学部附属病院にて看護師研修。
- 1984年 同大学院医学研究科研究生
- 1993年 アメリカ国立癌研究所研究員
- 1996年 熊本大学医療技術短期大学部に採用
- 2001年 宮崎大学医学部看護学科
- 2007年 熊本大学医学部保健学科教授

自分のプラス面に目を向けて！

納得のいく看護を

高校生の時に「数学の教師は女性だとなかなか就職が難しいよ」と数学教師から聞きます。当時、身体も弱くて病院にも通っており、主治医から「自分の身体の健康管理のためにも、医療系の勉強をしたらどう？」というアドバイスを受けました。熊本大学の教育学部で看護の勉強ができることがわかり、受験。数学ではなくても、やはり教育職につきたいという希望があったのです。

大学3年生の病院実習での事、前田さんは暑いので、患者さんをお風呂に入れたいと思い看護師に聞くと「主治医に聞いて」と言われ、主治医に尋ねると「それは看護師が決める事じゃないの」と言われました。そういったいくつかの経験から「看護において何をどうしたいか、自分で納得のいく根拠を持ちたい」と、強く思うようになります。

1984年からは働きながら医学研究科研究生として発生学を学び、「喫煙の胎児への影響」について実験研究を行い、その結果をもとに調査研究し、新しい知見を得ることができました。

米国立研究所の研究員に

93年、夫の米留学が決まり、前田さんは退職します。ずっと忙しく突っ走ってきたので、ゆっくり子どもと向き合うこともできなかったことから、「米国では主婦業に精を出し、子どもと精一杯つき合っていこう」と、専業主婦を目指したものの「最初は良かったんですけど、やっぱり向いていないことがわかって」、数ヶ月後には米国国立癌研究所の研究員になります。エイズ研究の研究室でしたが、基礎の研究者と臨床の研究者が一緒にいるため、情報交換が活発に行われ、HIV感染患者たちがどのようなことで困っているのかがよく見え、看護の在り方を学ぶうえでも勉強になったといいます。

地域ネットワークづくりを

感染症看護分野では、治療が困難なMRSAのような薬剤耐性菌感染を拡大させないための支援として、現在、情報提供のためのHPを立ち上げる準備中で、地域ネットワーク作りに力を注いでいます。

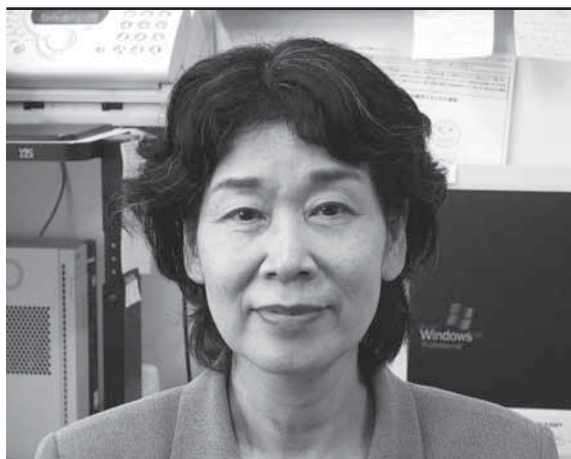
また、心身のストレスによって、看護師を続けていく気力のなくなった人たちが本来ある力を取り戻すような、医療者のためのエンパワメント・プログラムにも関わり、「看護の専門的機能と役割」の研究に続き、様々な分野で活動されています。

宮崎大学から、思春期の子どもを対象としたHIVなどの性感染症予防教育を続けてきました。これはピア(=仲間)カウンセリングといい、共通部分の多い同年代の若者が一緒に話し合い支援しあうことで問題を解決するサポート手法。ピアカウンセラー養成の訓練を受けた大学生が、高校生と共に人工妊娠中絶、性感染症等の性に関する問題を話し合うというものです。

宮崎へは、当時小学生だった末のお子さんだけを連れて赴任。当時、高1と中1だったお子さんは寮のある私立中高に入り、家族全員の協力体制で乗り切りました。「より深い親子関係を築くために、親の仕事ぶりを子どもに見せる機会が必要でしょうね」。



モデルを使用した採血の演習風景



医学部

教授 山内 葉月さん (母子看護学)

Yamauchi Hazuki

●プロフィール

- 1970年 熊本大学医学部付属看護学校・助産婦学校卒業
- 1984年 熊本商科大学商学部卒業
- 1988年 日本大学文理学部卒業
- 1995年 熊本大学医療技術短期大学部講師
熊本学園大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了
修士(経済学)
- 1997年 山口大学医療技術短期大学部教授・医学部保健学科教授
- 2002年 熊本大学医療技術短期大学部教授
- 2003年 熊本大学医学部保健学科教授
- 2004年 山口大学大学院医学研究科修了 博士(医学)

さまざまな学問を通して、「母子の健康」を考察

医学部保健学科の前身である看護学校を卒業してすぐに、恩師の勧めで、山内さんは高等学校の看護科の教師になります。以後、現在に至るまで看護教育一筋ですが、山内さんの経歴には多彩な学問を学んできた足跡があります。

働きながら、学園大学の前身である熊本商科大学商学部で学び、卒業後は日大文理学部英文科に編入学し、学園大学大学院修士課程では経済学を学びます。商科大学では商業科教育法を学ぶことを通して、同じ職業教科である看護学について看護科教育法の確立を試み、併せて、看護労働についての研究をしました。英文科ではナサニエル・ホーソーンの小説『緋文字』を卒業論文のテーマに選び、私生児を抱えた主人公の生き方に対して、母性看護の視点から分析を試みました。また、看護教員をしながら商学部と文学部で学ぶ間に、それぞれに関する高等学校・中学校の教員免許も取得しています。

経済学の分野では『労働力再生産からみた母性看護の基本問題』をテーマに修士論文を作成し、医学の分野では『妊婦の健康に及ぼす夜勤の影響』で博士号を取得しました。このように、多彩な学問分野の視点から、「母子の健康」という一貫したテーマを、山内さんは追い続け、考え続けてきたのです。

自分に合う何かを見つけて仕事に活かす

助産学について学生に教える毎日ですが、看護学の実習を経験する過程で挫折を味わう学生も出てくるといいます。誰にでも得手不得手があるのだから、そんな時でも「決して諦めないで欲しい。ひとつのことだけで判断しないで。」と、山内さんは願います。例えば、技術を学ぶことが好きな学生もいれば、人と関わることが好きな学生もいます。仕事とは多面的なものなので、毎日を大切に学んでいけば、必ず自分に合う場所が見つかるものだそうです。「私も、教職が自分に向いているか迷うことは今でもあります。でも、色々な点で自分の工夫を生かせる職業なので、楽しいですよ。若い人たちと関わるのはエネルギーをもらえますし」。

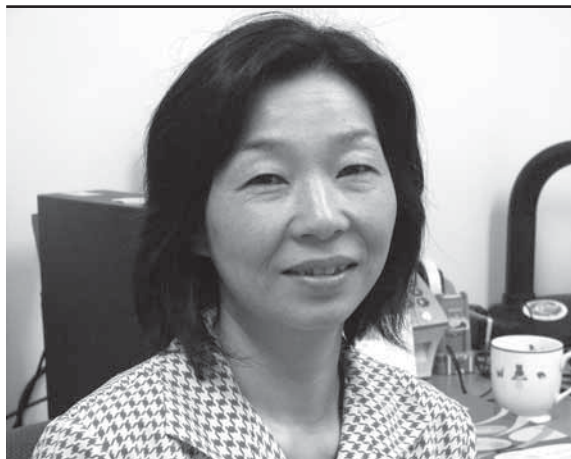
子育てをしながら働く女性の支援を

リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは、性と生殖に関する健康と生命の安全を女性のライフサイクルを通して権利として捉えようという概念です。このためには、男女が共に性に関する正しい知識を持つことが重要です。熊本県看護協会の助産師職能委員長も務めている山内さんは、幼少期から思春期までを対象にした次世代育成事業「健やか親子21」として、性教育の出前授業を行うなど、大勢の母親と子どもたちのために様々な活動をしています。出産の場所が家庭から病医院に大きく推移したことから町や村からお産婆さんの姿がとても少なくなっていた経緯にも触れ、助産師の自立した働き方を支援する活動にも力を注いでいます。「自分の学んだことを社会に還元していけるような仕事ができるといいですね。働く女性が赤ちゃんを産み、育てていく上での社会的支援を、これからもずっと続けていきたい」と、おっしゃいます。



医学部保健学科の助産学実習室にて

看護学・助産学教員という職業を通して。



医学部

准教授 永田 千鶴さん (地域看護学)

Nagata chizuru

●プロフィール

- 1984年 関東通信病院附属高等看護学院で看護師として働く。
- 1986年 公衆衛生看護学院で一年間学び、保健師・助産師の資格取得。
- 1987年 医療法人で保健師として働く。
- 1990年 ニュージーランドへ私費留学、小さな老人病院の看護職として働く。
- 1991年 佛敎大学社会学部(通信)で5年間学ぶ。社会福祉士の資格取得。
- 1997年 熊本学園大学社会学部学科に採用
- 2001年 熊本大学法学研究科修了
- 2004年 九州保健福祉大学社会学部研究科博士課程入学
- 2005年 熊本大学医学部保健学科准教授
- 2007年 九州保健福祉大学社会学部研究科博士課程修了、博士社会学取得。

志あるところに道はある。

東京、さらにニュージーランドへ

小さい頃から看護師を意識していたという永田さん。

「東京に出たい」と、関東通信病院付属看護学校で学び、その後2年間関東通信病院で働きます。その時に属していたのが「継続看護検討班」で、退院した患者さんに対するケアを行っていました。退院後をどのように見守っていくのか、それを地域の保健師につなげる役割でしたが、この2年間で、訪問看護の必要性を強く感じた永田さんは、1986年、公衆衛生看護学院で学ぶため、熊本に帰り、翌年、医療法人で保健師として働き始めます。試行錯誤の毎日でしたが、自分が学んだことを仕事に生かすことができました。

1990年9月、永田さんは一年間休職し、ニュージーランドへ私費留学します。ニュージーランドでは小さな老人病院で看護職について働きました。日本と違って患者さんは、女性はワンピースを着て、ストッキングをはき、お化粧をきちんとして、アクセサリを身につける。時間をかけてゆっくりと、それを毎日繰り返すのです。人間が人間らしく日常を過ごすということを考えさせられた一年間でした。

困難を乗り越えて

ニュージーランドから戻った永田さんは、すぐに大学に入ります。復職して働きながら佛敎大学社会学部の通信教育で学び、5年かけて卒業します。その間、結婚、出産を経験。1996年9月に卒業し、社会福祉士の国家資格を取得。翌年4月に熊本学園大学で介護福祉士養成課程の教員に採用されます。「大学教員としては資格が足りなかったのですが、条件を満たす人がいなかったようです」。そこで2001年に熊本大学法学研究科修了後、2004年、九州保健福祉大学社会学部研究科博士課程に入学します。

研究テーマは「認知症高齢者ケアの質を向上させるためのケアプロセスを評価するガイドラインの作成」というものでしたが、この研究は、ケアプロセスの質という見えにくく、評価が困難なものに焦点をあてるため、なかなか理解が得られず、博士課程受験には二度失敗しているそうです。しかし、諦めかけていた頃に九州保健福祉大学を受験し、指導教授から「このような研究が大事です」と返事をもらい、この研究に入ることが出来ました。

地域密着型のサービスを研究

2005年より熊本大学医学部保健学科で、老年看護学や社会学部論の講義をしています。また、学生の実習は熊本大学病院ではなく、外の病院や施設で行っています。これまで、20施設開拓し、どの施設も快く引き受けてくださるので、とてもありがたい。「ある程度恵まれた大学病院内だけの看護を学んでも、熊本の看護の質は上がりません。ですから、地域全体に目を向けて欲しいという思いがあるのです」と、永田さん。卒業生が熊本大学病院を退職しても、大学病院以外で実習を経験していれば選択の余地が広がるのではないかと、学生に対するそんな思いもあるそうです。

他県からの依頼で、『地域密着型サービスの研究プロジェクト』が、この8月から一年間始まります。家族の支えと「志あるところに道はある」をモットーに、常に現場と関わり現場に励まされながら、研究と教育は続きます。



2004年頃学生たちと(前列中央が永田さん)



医学部

講師 永田まなみさん（基礎看護学）

Nagata Manami

●プロフィール

- 1980年 熊本大学医療技術短期大学部卒業後、熊本大学附属病院看護師として働きながら、放送大学、熊本大学法学部大学院修士課程で学ぶ。
- 1997年 医療技術短期大学部助手
- 2002年 同大学部講師（2004年からは医学部保健学科）
熊本大学大学院社会文化科学研究科公共社会政策学入学
博士課程修了（研究領域：看護哲学、看護倫理）

「ケア」の分析によって看護の意味を問う

熊本大学附属病院で17年間を看護師として働きながら、放送大学、熊本大学法学部大学院修士課程と学び続けてきた永田さん。修士課程2年の時に医療技術短期大学助手に採用され、その後、2002年に同大学大学院社会文化科学研究科に進学。博士論文と取り組む日々の中で、徐々に体調を崩し、博士課程を6年がかりで修了したのは、2008年春のこと。博士論文「看護におけるケア—看護哲学序論—」のコアの部分が2008年10月学会誌に掲載されることが決まりました。「ホッとしました。本当に嬉しいです」。発展途上にある看護学で、看護の理論・臨床・倫理を架橋するキーワードは「ケア」です。ケアは誰もが（例えば母親）行っていることで、それが何かということを改めて問われるとナースでさえも言葉にすることが難しい。永田さんは、ご自身の長い臨床経験をふまえて、この論文で、看護領域で用いるケアという言葉の概念分析を行い、望ましい看護の中核の意味を問いました。

お母様、そして職場の先輩の支えによって、博士論文をまとめることができました。

勇気とは恐れを乗り越えること

「早く学位を取らねば」という焦りから先を急ぐあまり、書物や文献の中から答えを見つけ、結論を導き出そうとしました。「論文は自分で考えなければならない」という根本的なことに気づかないまま、「頑張らなくて」という気持ちと「自分に出来るのだろうか」という不安から身体が徐々に疲弊していきました。そして、うつに。何もしたくない、何もできない日々を送ります。それでも、ウォーキングだけは必死に続けました。始めた頃は何も目に映らなかつたのですが、次第に、自然の変化を感じられるようになりました。レンギョウの黄色い花が咲き乱れるなかを歩き、初夏を感じ、ぼつかり浮かぶ白い雲を眺めながら歩きました。「全てが初めてのことのように感じられました。ずっと忙しく、季節の移ろいなど気にも留めず、わき目もふらずに突っ走ってきていたんですよ」。そんな中で自分を振り返るうちに、どうやって自分が体調を崩したのかが少しずつ見えてきたのだそうです。

また、療養中に映画を見に行った時のことですが「勇気がある、というのは、恐れがないということではなくて、恐れを乗り越える（乗り越えようとする）ことなんだよ」という映画の言葉に、永田さんは涙が止まらず、映画終了後も立ち上がれなかったそうです。

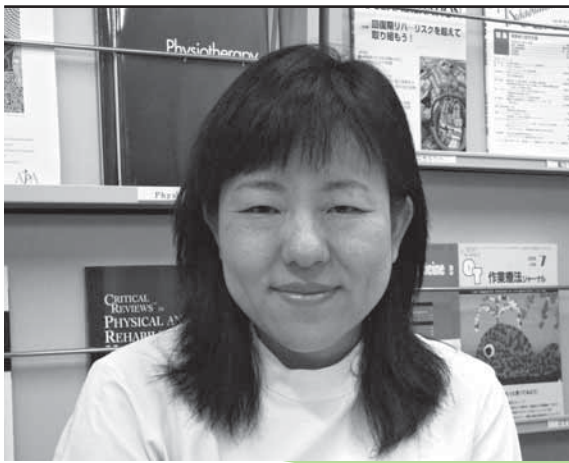
知るを楽しむ、プチウツを乗り越えよう

このような経緯を経て「何で私は看護の研究をしたかったの？」という研究者としての基本にかえり、再びその答えを自分の中に見つけることができたのです。それは、自分自身が経験した「看護師という職業の価値と、今、進行形で働く看護師たちの思いや考えを私が代弁していかなくて」という使命にも似た思いでした。「レポートが書けない（やりたいのにできない）」といったプチウツ状態にもなる学生たち。その気持ちが、今ではとてもよくわかるようになりました。「学生を教育することを大切にしてください」という先輩教師からの言葉を受け止め、「共に学び、共に研究していただけるような次世代の研究者に会えたら本望です」。研究の基本は“知るを楽しむ”そして“知らないということを知る”ことなのだ、と、今、実感している毎日です。



修士課程から12年間お世話になった師匠と。

看護研究は人間のための実践の学問。



大学附属病院

助教 **大串 幹**さん

Ohgushi Miki

●プロフィール

- 1986年 佐賀医科大学卒業後、熊本大学医学部附属病院整形外科で研修医に。その後、同大学院医学研究科にて単位取得。
- 1993年 同大医学部附属病院リハビリテーション部勤務。
日本整形外科学会専門医、リハビリテーション科専門医、医学博士の学位も取得。
- 2008年 熊本大学附属病院リハビリテーション部助教

「苦勞は買ってでもしろ」って、本当かも知れない。

医者として心も体も見てみたい

父親も医師だったという大串さん。何よりもご本人が幼い時から身体が弱かったため、お医者さんとはとても近い関係だったそうです。いつもお世話になっていたことから「恩返しをしたい」という気持ちを持つようになります。そんなわけで、ずいぶん小さい頃から「お医者さんになりたい」と思っていたそうです。

学部生時代には、何を専門にするかを迷いに迷ったそうですが、「患者さんが求めるものを本当に提供できるのはどこだろう？」と考えるうちに、リハビリテーション専門医にいきついたのだそうです。「どうせ医者になるのなら、人の心も身体も全体を見たい」と、大串さんは考えます。そして、リハビリテーション科のない熊本大学附属病院でリハビリテーション専門医になるためにはどこで勉強したらいいのかを相談し、整形外科の研修医になります。熊本大学医学部大学院生時代から週一回はリハ部に通い臨床経験を積んでいったそうです。



室内用和式移動装置
「楽のり君」
後方の装置と接続することで
座ったまま移動が可能。

人は失敗から学び、そこから育つ

院生時代から、上司からは厳しく鍛えられたという大串さん。結婚をし、小さいお子さんを抱えながら、仕事をやる。泣いたことも挫けそうになったことも何度もあるそうです。三年半前に亡くなられた大串さんの夫は、そんな大串さんの「精神的な部分でのサポートをし続けてくれました」。大串さんが挫けそうになると、夫は「負けるんじゃない、大丈夫、あなただったら出来る」と、発破を掛け続けてくれました。

辛いこともありました。今思えば「鍛えてもらって、本当に良かった」と思うそうです。なぜなら、今では「楽しんで良い目には合わない」と実感するからです。つまずいたり失敗したりといった経験からしか学び取れないことが、世の中にはたくさんあります。人は失敗から学び、そしてそこから育っていくのでしょうか。

現在では三人のお子さんから励まされているとおっしゃる大串さん。家族の絆を、とても大切にしていられるそうです。

研究は自分発見の旅

若い人たちには「是非、研究の道に入ってきて欲しい」と、大串さん。行き詰まったらテーマを替えてもいいのだから、とにかく研究を継続していくこと。「何年掛かったっていいんです。時間を掛けてやればいい。そこには様々な出会いが待っていますから。研究だけでなく、得るものがたくさんあります。キャリアアップのためでもいいし」。そして、論文を書くということは「自分だけの発見をする」ということなのだから、エキサイティングだし、とても面白いとおっしゃいます。

また、やりがいのあるリハ専門医の仕事についても「リハビリのテクニックだけの問題ではないんですよ。大学病院という特性から、命に関わるような状況で運ばれてくる患者さんがほとんどです。急に動けなくなった患者さんは、心神喪失状態になります。今まで出来ていたことが出来ないわけですから。そういった患者さんが自分自身を理解していく過程を、リハ医は心身の両方からサポートしていく必要があるのです」。大学にリハビリテーション医学を学ぶ講座が出来て、リハ医が増えてくれることを願う大串さんです。



大学附属病院

助教 上土井貴子さん

Joudoi Takako

●プロフィール

- 1993年 福岡大学医学部卒業
熊本大学大学院医学薬学研究部発達小児科入局
2000年 熊本大学大学院医学研究科終了、医学部附属病院医員
2003年 大学院医学薬学研究部小児発達社会学分野助手
2006年 医学部附属病院発達小児科助教

見えない物事を明らかに

研究室は、シューベルトの曲が流れ、トルコキキョウの花が活けられ、とても心地よい空間でした。

上土井さんが不登校児に出会ったのは研修医時代でした。まだ、不登校という言葉自体が社会概念化していない時代で「その時、何もできなかったんですよ」といいます。見えてこないその原因を何とか明らかにできないものか。以後、現在にいたるまでの15年間、テーマを変えることなく研究を続けています。研究を始めてしばらくは、どこの学会にも所属しない、発表するジャンルすらないという状況でした。が、そこには自分たちの手によって見えない物事を明らかにしていく実感があり、やりがいを感じました。

上土井さんは発達小児科で友田明美准教授の発達社会学とともに睡眠・メンタル・発達支援外来グループの一員として、『小児における疲労および心身症の医学・生理学的・分子遺伝生物学的研究』という研究プロジェクトに携わっています。

「子どもの疲労」が問題行動の原因だった

発達小児科外来では小児発達学不登校グループに属し、不登校や小児慢性疲労症候群、自閉症、注意欠陥多動性障害、学習障害等について診療や研究にあたっています。不登校、引きこもり、暴力など、様々な問題を抱えた子どもたちと接しながら、上土井さんは「子どもの疲労」ということに行きつきます。不登校の直接の原因が「いじめ」だった場合でも、「いじめ問題」が解決したからといって、子どもたちが学校に戻れない場合があります。なぜかという、持続する不安や緊張が、脳機能の低下を招くからです。この脳機能の低下こそが子どもの疲労の中核です。自律神経機能障害、ホルモン分泌機能障害、睡眠障害などにより大脳皮質がうまく働かなくなり、思考力、集中力、意欲の低下、鬱状態という「小児慢性疲労症候群」に移行すると考えられています。その原因のひとつは「子どもたちの慢性的な睡眠欠乏状態」。子どもを慢性疲労から守るには、大人が子どもの睡眠覚醒リズムを把握し、午前中にたっぷり光を浴びて夜には光にさらされないような生活環境（光環境）を整えることが必要です。

仕事と家庭のメリハリを

現在、上土井さんは治療のほか、予防のために、幼稚園や小学校の協力を得て長期的な睡眠に関するアンケート調査を行っています。頼まれれば講演にも出向き、ご自分の研究を病院内だけでなく社会に還元していくことにも力を注ぐ毎日です。しかし、「家庭には、一切仕事は持ち込みません」。朝は早く起きて、クラシック音楽を聴きながら朝日が昇るのを眺め、ハーブの世話をします。自ら、『早寝・早起き・朝ごはん』を実践しています。上土井さんの研究室と同じく、気持ちのいい家庭が想像できます。仕事も家庭も「自分のためにやっている」ことを忘れず、自分の好きなクラシック音楽や植物を育てるといった日常も大切に、心が安らぐようにしています。「そうしていないと、人に優しくなれませんから。これからも仕事は、楽しく永く続けていきたいです」。



「趣味は動物の生態特に睡眠様式について興味を持ち、いろいろな動物を見て回ることです」

(写真は睡眠中のカンガル親子)

《早寝・早起き・朝ごはん》が子どもたちを育んでいく。



大学院自然科学研究科

教授 **渡邊アツミ**さん

Watanabe Atsumi

●プロフィール

- 1966年 熊本県立第一高校卒業
- 1970年 熊本大学理学部卒業
- 1974年 理学部助手としてスタート
- 1985年 教養部助教授
- 1997年 理学部助教授
- 2003年 理学部教授
- 2006年 大学院自然科学研究科教授

数学研究は発見の喜びと感動の連続です。

何となく数学の勉強がしたくて

代数学の研究で知られる渡邊さんは、もの静かな印象でした。ひとつひとつ言葉を選びながら、丁寧に話されます。

「小学校のころは、とくに算数が好きだったわけではありません。中学校から数学に関心を持つようになりました。」

第一高校から熊本大学理学部数学科へ入学。ちょうど70年安保の学生運動が熊本大学でもさかんでした。「自分も何か新しいものを発見したい。それを論文にまとめて、誰かに評価してもらおう時の喜び。そういうことの積み重ねとして現在があるのです。」

大学院修了後10年くらいたって、論文と言えるようなものが書けました。そのころから他の大学の専門家とも交流するようになりました。

数式の中にある思いがけないドラマ

数年前、「博士の愛した数式」という映画が話題を集めました。数字は無機的なものではなく、数の中に思いがけない法則やドラマがあり、渡邊さんはそんな数学の愉しさに魅了されたのです。「家事労働を負担に感じることもなく、自宅でもかなりの時間を研究に費やすことが出来ました。ただ、大学での勤務が終わった後は、家に帰り、ふつうの会社員のひととあまり変わらない生活をしています。テレビを見るとか、本を読むとか。いつも数学のことばかり考えているわけではありません。」

国内外の学会で知り合った研究者とメールで情報を交換することもあり、そんな時間も心なごむひとときです。

理学の基礎理論としての研究

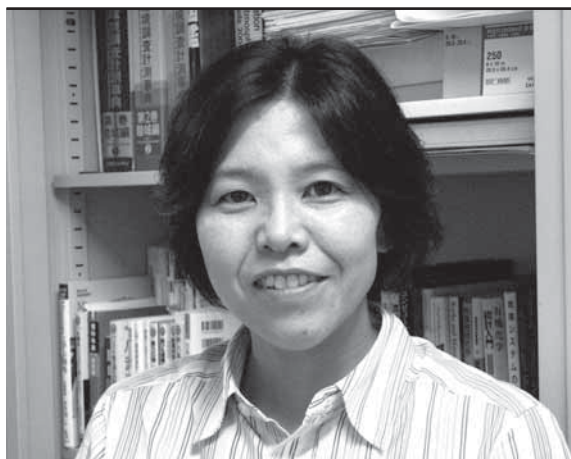
私は有限群の表現論を研究しています。群は数学における最も基本的な概念の一つで、数の足し算や、行列のかけ算のように、二つの要素の間に演算が定義された集合です。群は数学だけでなく物理学や工学でも用いられます。これまで5名の修士の学生の指導をしましたが、卒業生の中には学位を取得し研究を続けている人がいます。

研究は授業の準備など教育の仕事や、委員会の仕事などの合間、又は自宅で行っています。未解決の問題に取り組む、新しい定理を見つけるなどの研究を行います。全く見当はずれのことを何日も考え続けていたり、出来たと思ったことに勘違いがあったりと、うまく行かないことの方が多いのですが、懲りずに日を置いて挑戦したりします。

これから数学の研究者を目指す人へは「数学の研究者を目指すなら、（ほかの研究もそうですが）英語も普通に出来ないといけません。論文は英語で書きますから。未知の世界を探求するのは、研究者ならではの醍醐味ですね。」



研究室で



大学院自然科学研究科

准教授 小島 知子さん (地球環境科学)

Kojima Tomoko

●プロフィール

- 1992年 東京大学理学部地学科卒業。大学院修士課程2年から、委託研究制度を利用して神戸大学地球惑星科学科で研究を行う。博士課程の途中で神戸大学理学部助手に就任。
- 2000年 ポスドク研究員として米アリゾナ州立大学へ。
- 2004年 熊本大学理学部環境理学科助教授。その後改組に伴い大学院自然科学研究科准教授。

SF小説

滋賀県の田園地帯で小学校教師を父として育った小島さんには二人の兄がいます。小さな時から兄のあとについて遊んだので、虫取りをはじめカエル、ザリガニ獲りなどはよくしたものだといいます。自然とふれあいながら、小島さんは百科事典も美術全集も揃っている家庭で育ちました。

小学生の頃から小島さんはSF小説が好きでした。高校時代には米国のSF作家、ラリー・ニーヴンのハードSFといわれるジャンルの小説が気に入って、わからない言葉が出てくると百科事典で調べながら読んだそうです。そして、「天文学を勉強したい」と思うようになります。東京大学理学部に進学した小島さんは、その後、隕石の研究の方へ移っていきました。

アメリカ留学で大気エアロゾルの研究へ

地学科で地質鉱物を学んだ小島さんは、大学院に進みます。指導教官の異動に伴い、東大に籍を置いたまま委託研究制度を利用し、修士課程、博士課程を神戸大学の研究室で続けます。博士課程2年の1995年10月に神戸大学の助手に採用され、博士論文に没頭するわけにはいなくなりました。その後、3年かけて博士号を取得しましたが、「このまま、自分は学生時代からの指導教官の下で、言われる通りのことをやっていたいいのか」という思いが徐々に膨らんでいきます。そして、ある日、武者修行に出る決心をします。

2000年、8月。小島さんは米アリゾナ州立大学にポスドク研究員という身分を得て旅立ちます。それまでやってきた「隕石の研究」からテーマを変え、「大気エアロゾル(チリなど)の研究」を始めます。

排ガスが大気中で化学反応を起こした固体や液体の微細粒子は人体にも有害であるばかりではなく、太陽光の散乱や雲形成などを通じて大きく気象にも影響を及ぼします。

アリゾナ州立大学で3年半大気エアロゾル研究をした小島さんは、それ以降、大気エアロゾル粒子を電子顕微鏡を使って分析し、性質を調べ、それらが環境に及ぼす影響の研究を続けています。「気象は複雑で、電子顕微鏡を使ったこの研究は面白いが手強い。まだまだ勉強中です」。

失敗することから、研究は始まる

助手の身分を捨てて、外へ飛び出した小島さんですが、指導教官は理解してくれました。また、「お前がやりたいならば、それをすればいい」と考える両親でもありました。幼少の頃から小島さんは「女の子なんだから」という言葉を親から言われたことがないそうです。

「研究は失敗から自分自身で考え、違う方法を見つけ、また失敗したらそこからまた考え、ついに思ったとおりになった時は本当に楽しい」といいます。『何が自分のためになるのか』だけでなく、『自分は何がやりたいのか』の答えを見つけ、その実現に向けて精一杯打ち込めば何かが見えてくるはずです」と、学生にエールを。ともに研究の楽しさを分かちあいたいそうです。



アリゾナ州立大学在籍中に訪れたグランドキャニオンで

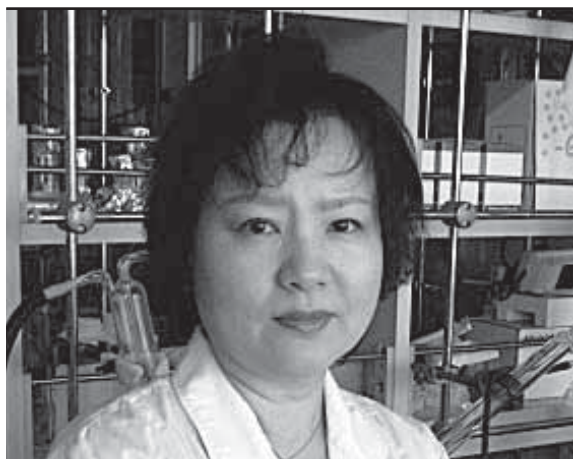
やりたいことを見つけてチャレンジしよう。

大学院自然科学研究科

助 教 **坂田眞砂代**さん
Sakata Masayo

●プロフィール

1979年 熊本大学理学部生物学科卒業
 1980年 化学及血清療法研究所技術研究員
 1986年 熊本大学工学部助手
 1999年 工学博士取得（熊本大学）
 2007年 熊本大学大学院自然科学研究科助教



自分の歩幅でマイペース

私のライフワーク「エンドトキシン」との出会い

熊本大学・理学部生物学科を卒業後、熊本市内の出田眼科で医療助手を1年半経験後、化学及血清療法研究所の技術嘱託職員となりました。ここでは、主に百日せき・ジフテリア・破傷風等のワクチン製造部で、品質管理のための動物実験や新規ワクチンの開発に携わっていました。この間にワクチン中に微量残存する「エンドトキシン（発熱誘因物質）」の存在を知り、注射溶液のエンドトキシンをピコレベル以下に低減させるのがいかに困難かを体験しつつ、契約期間である5年間があつと言う間に過ぎました。いまから20年以上も前のことですが、高卒の女性は補助職の正職員として勤務しており、大卒の女性は総合職としてはなかなか雇ってもらえない時代でした。自分が女性であること、世の中はまだ男性社会であることを思い知らされました。

研究者として

幸運にも、30才のとき、熊本大学工学部の助手として、新たな仕事をスタートすることができました。平山忠一教授との出会いは、勤めていた研究所の上司から紹介していただいたのがきっかけで、公募で採用していただきました。ここから、エンドトキシンの選択吸着剤の開発に没頭していきました。助手としての仕事をしながら、10年ほどかかりやっと博士号(工学)を取得しました。この間、エンドトキシンとの関係は続き、科学研究費等の外部資金補助のもと、数年前にエンドトキシン吸着剤の商品化にたどり着くことができました。現在は、核酸やタンパク質など生体関連物質の吸着剤の開発等、ライフサイエンスを柱に、世の中に役に立つ高分子材料の開発を目指しています。

主婦として

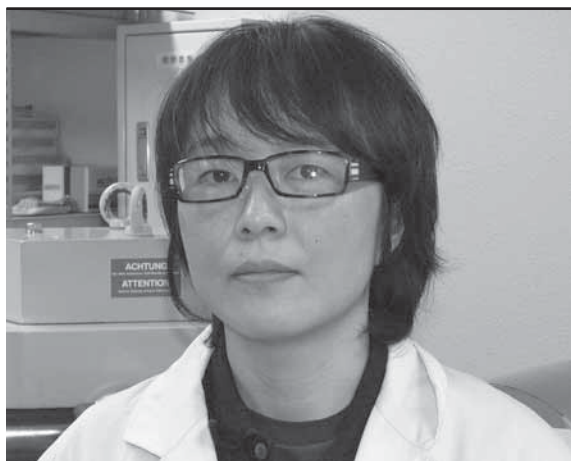
33才の時結婚し、子どもには恵まれませんでしたが、なんとか現在も仲良く暮らしております。夫は元自衛官で、現在、みかん農園と選果場を経営しており、私とはまったく異なる職についています。家に帰り着くと普通?の主婦にもどっているつもりで、お互いに自分の仕事の愚痴などを言い合って、気分転換をはかっています。私どもの結婚生活で守っていることは、夕食はなるべく一緒にすること、仕事以外の会話を楽しむこと、お互いに細かく干渉し合わないことなどでしょうか。出張の多いこのごろ、毎日食事をともには無理ですが、家事をさぼっても、あまり文句を言わない我慢強い夫に感謝、感謝。

これからの男女共同参画

現在、熊本大学工学部の化学系の女子学生の割合は3割を超えているにもかかわらず、教員の数は、27名中女性教員はたったの1名です。必然的に、女子学生から私への質問や人生相談も多く、昼休み時間では世間話で盛り上がります。若手の女性研究者・技術者を育てていく上にも、女性教員は必要であると思いますが、未だ少な過ぎるのが現状です。何才で結婚し、何人子どもを生むかなどで、女性の人生の歩幅も様々です。人生これからの若い女性研究者へのメッセージとしては、「人生のステップアップの歩幅は自分で決めて、人に左右されないこと。決して自分が遅れていると焦らないこと。」これからの男女共同参画は、まず男性・女性の両方の歩み寄りから始めましょう。ひとりの人間として、どう生きるかを考えたいものですね。人生、マイペースでハツラツと!!



学生と一緒に



大学院自然科学研究科

助教 可児 智美さん (地球環境科学)

Kani Tomomi

●プロフィール

1996年 京都大学大学院理学研究科博士課程入学

1999年 西南日本の付加体中の石灰岩及び緑色岩の放射年代学的・地球化学的検討の論文で博士号を取得。通産省工業技術院 地質調査所（現・独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター）に入所しハワイの岩石調査をするなど1年半を過ごす。

2000年 熊本大学大学院自然科学研究科助教

2003年 米国ロードアイランド大学

その後、サンディエゴ州立大学の研究室でハワイの岩石の同位体分析をする。

学ぶとは誠実を胸に刻むこと

可児さんが学生時代に研究室で手にしたのが1個の隕石でした。「この小さな1個の隕石から太陽系のことを知ることが出来る」ことに驚き、初めてサイエンスに触れたそうです。「受験勉強はもちろん大学の授業も受身の作業なんですよ。学生とも話しますが、理学部では卒業研究は必修ではありませんが選択を勧めます。理学部でも卒業研究をする段階になって初めてサイエンスってどういうものなのかを真剣に考えることになるからです」。ルイ・アラゴンの詩「ストラズブル大学の歌」の中に、「教えるとは希望を語ること／学ぶとは誠実を胸に刻むこと」という一節に可児さんは心打たれたそうです。これはサイエンスに係わる者の心構えとも受け取れる美しい言葉です。

アフリカとアメリカで地球を探る研究

ハワイの火山岩・高千穂（宮崎）の炭酸塩岩（石灰岩）・ナミビアの炭酸塩岩。可児さんは、これらの岩石数 mg を溶かし、分析器にかけ化学組成を分析するという「同位体分析」を行っています。海洋島であるハワイ火山の溶岩は地球深部のマントル物質をその起源とするので、地球深部の情報を知ることができます。それを解析し、地球内部物質循環を理解しようという研究。宮崎県の高千穂からはペルム紀（およそ2億6千万年前）の石灰岩を採取し、当時の海の同位体組成や化学組成を知ることから地球表層環境変動の記録を、また、ナミビアの炭酸塩岩からもおよそ7億年前の古海洋環境変動を解読する研究を続けています。

2001年にはJAMSTEC（海洋研究開発機構）の潜水艇でハワイの火山岩を採取しました。2002年夏には1ヶ月ほどアフリカ西南部のナミビアに行きました。町で食料と水を車に積んで山へ行き、炭酸塩岩を採取するという苛酷な作業。このときは7人のグループで、約1tの炭酸塩岩を採取しました。2003年から1年間米国に行き、ハワイの火山岩の同位体分析を行いました。サンディエゴ大学では何日もかけて車で大陸を移動する楽しさ、国立公園でキャンプをする楽しさを知り、生活をリフレッシュすることを覚えました。「様々な場所で露頭（地層や岩石が露出している場所）を見ることができるので、自分の研究の上でも興味深いし、実に楽しいんです」。

発見する喜びに包まれて

「ドクターをとってから、こうなったら研究者になろうか…と決意しました。ですから幼い頃から研究者を目指すとかそういうことではなかったんですよ」とおっしゃる可児さん。修士課程から博士課程へと進めば進むほどプレッシャーを感じ、「もう何としてでも3年間で博士課程を修了したい」と思いましたが、順調に研究が進まず、努力を重ねました。先輩や友人の協力がなければ到底無理だったと振り返ります。

「誰も知らないことを自分が見つかるってことなんですから、簡単にはいきませんよね」。そういった地道な作業を毎日続けていくことが研究なのですが、「せつかく理学部に入ったのならば気の合いそうな指導教員を選び、卒業研究などを通してサイエンスに係わって楽しさを知ってほしい」と、学生たちに伝えています。

ユタ州ザイオン国立公園にて
(Zion National Park)

理学部で、サイエンスの楽しさに触れてほしい。

准教授 岸田 光代さん

Kishida Mitsuyo

●プロフィール

東京都生まれ。
 1983年 北里大学水産学部卒業後、東京大学海洋研究所の研究生となる。
 1986年 イギリスのバース大学で研究員として魚類のメラニン凝集ホルモンについて研究。
 1993年 アメリカのロードアイランド大学でテラピアのピテロゲニンについての研究でPH.D(理学博士号)を取得。その後、ロードアイランド大学理学部、海洋学大学院でリサーチアソシエートとして魚類の内分泌・生理学分野の研究を続ける。
 1997年 ポストン大学でシニアリサーチアソシエート、リサーチインストラクターとしてゼブラフィッシュのアロマテースについて研究。
 2001年 熊本大学大学院自然科学研究科講師
 2007年 熊本大学大学院自然科学研究科附属総合科学技術共同教育センター講師
 2008年 熊本大学大学院自然科学研究科附属総合科学技術共同教育センター准教授



興味のあることを追求すれば、道は開く。

脳アロマテースの研究へ

東京生まれの岸田さんは、小さい頃から生き物が好きで将来は獣医になりたいと思っていました。

現在熊本大学大学院自然科学研究科で、動物生理・内分泌学の研究分野において、「脳アロマテースの発現と脳初期発生」という研究をされています。エストロゲンはアロマテースの働きによりアンドロゲンを基質として産生されるステロイドホルモンであり、一般的には、卵巣で産生される生殖に関わる女性ホルモンとして知られています。一方、エストロゲンは脳においても産生され、情報の処理と伝達をする神経細胞ニューロンの成長分化、保護、可逆性等に作用しています。魚類には脳型および卵巣型のアロマテース遺伝子があり、脳では主に脳型アロマテースが発現します。岸田さんの研究で用いるゼブラフィッシュは受精後24時間以降脳型アロマテースの発現が急激に上昇することから、エストロゲンと脳初期発生の研究に適しているそうです。エストロゲンが神経調節因子として働くメカニズムについて研究しているそうです。

男も女も無い、研究者というスタンスが心地よい。

「生命の不思議を探求することは、とてもエキサイティングなことです。実験を重ねて結果を導き出す。思うような結果が出たときは何ともいえない瞬間です。小さな研究の成果が病気の解明に繋がり、それが人の助けになれたらいいですね」と研究に情熱を傾ける日々が続きます。

日本での学生生活でも男女の区別を感じたことはなかったそうです。「イギリスやアメリカの大学でも女性研究者はたくさんいます。みな普通に研究活動をしています。私も好きな研究が続けられる環境にいられることは幸せだと思います」という岸田さん。家族に研究者はいなかったそうですが、ごく自然に研究者としての進路選択したそうです。

海外の大学へ出て、個人としての独立心がついたそうです。「そこには男・女、人種など戦わなければならない事柄もありました。いろいろな経験を通して自分の価値観を確立することでおのずと目的や進むべき道が見えてくるんです」という。「アメリカの若者は将来の夢を語る時に、人の人生に影響を与えたいということをよく言いますが、日本の若者も自分がどのように役に立てるか考えてみると、自分の進路が見えてくるのではないのでしょうか。」

研究者としての道をひたすら歩いてこられた岸田さん。後輩たちにアドバイスするなら「何も悩む必要は無いと思います。『今自分が興味のあること、好きなことを追求すればおのずから道も開く』と思うんです。私の場合は特に悩むことなく研究を続けてきて、現在の仕事に就きました」。そこには研究者として突き進んでこられた信念を持つ強い意志が感じられました。



実験に使用するゼブラフィッシュ

生命資源研究・支援センター

助教 **吉信公美子**さん

Yoshinobu Kumiko

●プロフィール

- 1995年 熊本大学理学部生物科学科卒業後、生命資源研究・支援センターバイオ情報分野に助教として勤務。
熊本大学遺伝子実験施設助手
- 2003年 熊本大学生命資源研究・支援センターバイオ情報分野助手
- 2007年 熊本大学生命資源研究・支援センターバイオ情報分野助教



根っから実験が好き。好奇心旺盛の少女は今も健在。

小さな頃から実験や手を動かすことが好きで好奇心旺盛、学研の「科学と学習」を目を輝かせて読んでいたと言う吉信さん。（もともと研究者ではなく、医療系の仕事につきたいと考えていました。）高校の生物の授業の時、細胞の神秘に触れます。「細胞のことがもっと知りたい」と思い理学部を目指しました。そして、卒業研究の時に、実験の面白さ、研究で未知の事柄に触れる面白さを、教官に熱心に指導してもらったことが転機となります。「研究の道へ進もう。身体の中で何が起きているのか見たい」と純粋に興味湧いてきたといいます。ちょうどその頃、平成6年に発足した学内共同利用施設である熊本大学遺伝子実験施設（通称GTC=Gene Technology Center）が、遺伝子実験における技術支援および情報提供を目的に設置されました。「自分自身が先頭を切った研究よりも、他の研究者と共同で成果を出したい、サポートと言う形で支援したい。根っから実験が好きなんです」と助手として就職。研究を進める一方、実験装置の操作やメンテナンス、ホームページ・講習会の開催による情報提供等、遺伝子実験施設の運営・管理を行っています。

研究はトライアンドエラー。

今の施設の運営・管理のほかに吉信さんが取組んでいる研究が、遺伝子トラップ法（遺伝子の機能を探る方法）を用いた遺伝子の研究です。トランスジェニックマウス（ノックアウトマウス＝約2万2000個ある遺伝子情報の一つを破壊したマウス）を作り、発生過程でどんな影響が出るかを追跡、その遺伝子の機能を探る研究です。発生過程の研究では、マウス体内から胚を取り出して、変異を観察したり、解析の材料にしたりします。この作業は繊細さを要しますが、きれいに摘出できたときの喜びと、その胚の美しさに神秘性を感じるといいます。「研究では思うように結果が出せないこともあります。トライアンドエラーで頑張っています。一つ見えた先にまた一つ見えてくるものがあるんです」この施設では9名のスタッフのうち1名が男子学生で他は全員女性です。女性中心の職場なので働きやすい環境と吉信さんはいいです。「回りにはアクティブな人が多く、私も頑張らなくて毎日刺激を受けている」と。

私たちの情報発信で、興味を持ってくれたり後に続く人が増えてくれたら。

GTCでも社会貢献活動としてホームページでイベントの開催や情報発信をしています。ページの管理・更新等、吉信さんが担当。「今はこうしてインターネットで情報を簡単に入手することができるようになりました。興味を持ったことは自分から積極的に調べることが大切です。遺伝子組換え食品など身近な問題として、もっと遺伝子やDNAについて知ってほしい。そして大学が行う体験講座「遺伝子と仲良くなろう」などのイベント等に参加してほしい。そのことがきっかけで、生命科学の研究の道に進む人がひとりでも増えてくれれば、とても嬉しいことです」。



実験室での実験の様子（そーっとDNAを注入する）

もっと遺伝子やDNAと仲良くなろう。

発生医学研究センター

教授 桑 昭苑さん

Kume Shoen

●プロフィール

- 1981年 東京大学薬学部入学
- 1987年 同大学院修士課程を修了後、帝人（生物医学研究所）に入社その後、夫が大阪大学博士課程に入学したため、帝人を退社し自らも阪大博士課程で学ぶ
- 1999年 アメリカ・ボストンのハーバード大学に夫妻で留学
- 2002年 熊本大学発生医学研究センター教授に就任
- 2006年 文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業立ち上げに参画
- 2008年 男女共同参画担当の学長特別補佐に就任

企業に就職しても、研究者になれる。

細胞再生研究の第一人者として

桑昭苑さんが、研究室の同僚で夫でもある和彦さんと共に、熊本大学発生医学研究センターに迎えられたのは2002年。現在、発生医療技術の最先端である、ES細胞からインシュリンを分泌する膵臓β細胞の前駆細胞を作り出す方法を研究。そこで培われた技術をもとに発生医学への応用を目指しています。「重症糖尿病の患者さんは、インシュリンを継続して投与しても、血糖をコントロールすることが難しく、その結果他の臓器がダメージを受ける場合もあります。臓器移植も提供者に限りがあるのが現実です。そこで、膵臓β細胞をES細胞から新たに作り出すことを研究しています」

苦労より楽しさを夫と共有する喜びの方が大きかった子育て

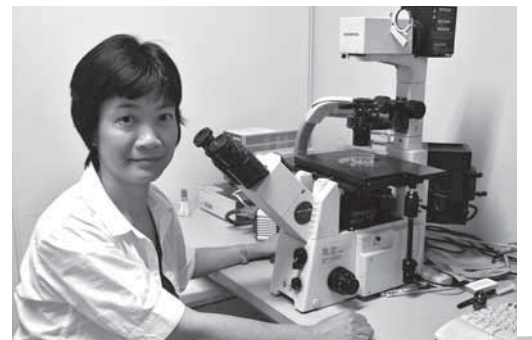
発生医学の最先端技術を研究する桑夫妻ですが、当然のことながら家事や子育てはお互いに分担しました。「子育ての苦労より、楽しさを夫と共有する喜びの方が大きかったですね」しかし、実験中に保育園から「子どもさんの具合が…」などと実験を中断して駆けつけることも。男女共同参画社会を実現する上で大切なことは、いわゆる“ワーク・ライフバランス”であると。「時間配分を考えて効率的に仕事を進めることで、仕事と家庭の両立も可能です」と桑さん。「仕事をする上で両立することが困難な問題が起きたとしても、一時、何かを犠牲にしなければならないこともあります。自分自身で納得できる解決方法が見つかるはず。とにかく諦めずにやりたい仕事を続けることが大事です。」

全学的な委員会が組織され、全学的な方針が打ち出された大きな意義

今、桑さんは学長補佐という立場で男女共同参画を推進する立場にいます。アプローチとして、子育て期間中の女性研究者を重点的にサポートすること。例えば、研究者に補助員をつけることにより、研究に集中してもらうことで1.5～2倍の研究を行ってもらえる。熊本大学では初年度である平成18年度から延べ9人の女性研究者が利用しました。短時間勤務制度・在宅勤務制度などの環境整備も全学的な制度の導入となり時間を要するものもあるが3年間の文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業で立ち上がるよう進めているということです。もう一つのアプローチとして、女子高校生に理系の進路選択をサポートすること。夏休み期間中、2日間の体験講座を行うなど情報提供を行っています。

「女性研究者支援モデル育成」事業がきっかけとなり、意識改革のシンポジウムが開かれ、全学的な男女共同参画委員会が組織され、全学的な方針である大学の男女共同参画推進基本計画を打ち出したことは大きな意義があったといいます。学長と女性研究者を囲む会も2回開催され、少しずつではあるが環境の整備や意識の浸透が図られてきました。女性研究者を国レベルや大学で支援する機運が高まっています。働きやすい制度を取り入れている企業も増えてきました。

これから研究者を目指す女子学生へ「たとえ回りに前例がなくても、諦めずにやるのが大切。私も一度企業に就職しましたが、また基礎研究がしたくて大学に戻りました。回り道をしていろいろな生き方があります。ただ後悔だけはしないようにがんばって研究者になって欲しい。」とエールを送られた。



ヒトES細胞培養室の前室にて



発生医学研究センター

助教 小林千余子さん

Kobayashi Chiyoko

●プロフィール

- 1994年 大阪教育大学教養学科自然研究専攻卒業
- 1999年 姫路工業大学（現兵庫県立大学）大学院で博士号取得
- 1999年 ポスドクとして熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設（発生医学研究センターの前身）
- 2000年 理化学研究所 発生再生科学総合研究センター
- 2004年 熊本大学発生医学研究センター勤務
- 2005年 熊本大学発生医学研究センター助教

“人生の目標”を教えてもらった加藤教授との出会い

小林千余子さんは大阪教育大学に進学して将来はそのまま教師になろうと考えていましたが、恩師の加藤憲一教授に出会い、先生のクラゲの研究に携わるうちに、「研究や実験の面白さに加え、先生をそこまで熱くさせる世界を自分も見たい」と研究者の道へ。姫路工業大学に入り、プラナリア（下等無脊椎動物）の再生現象を研究。その後、理化学研究所でもプラナリアの研究を続けました。その間任意の遺伝子の発現を抑制する技術を習得するために渡米します。「プラナリアは10等分するとそれぞれが元の形に再生するんです。どうして当たり前のように再生するんだろう？目の前で起こる現象の不思議にのめり込んでいきました。」

プラナリアの研究は小林さんたちの出したデータが最先端。新しい実験や解析方法を考えながら答えを出す過程の面白さに研究の日々が続きます。

戸惑いの連続の中にも、発想の転換を

現在小林さんは、熊本大学発生医学研究センター・細胞識別分野で、腎臓の発生や再生をテーマに研究をしています。「腎不全の画期的な治療法はなく、最終的には透析に頼らざるを得ません。腎臓の再生研究はまだ始まったばかりです。マウスの胎児期の腎臓を取り出し、単一細胞にし、特殊な細胞上で培養すると、一個の細胞からコロニーが形成され、このコロニーは糸球体、近位尿細管、遠位尿細管というネフロンを構成する多系統の細胞へ分化します。また解離した細胞を再凝集させ器官培養すると、3次元構造を再構築できることが示されています。そこで腎臓前駆細胞から一系統への細胞分化系を確立したり、再構築でネフロンと呼ばれる腎単位を再生、移植する技術が開発できれば、治療に応用できるのではないかと考えています。今までのクラゲやプラナリアなど現象ありきの基礎研究と比べて、発生再生医学の世界は将来どうやって人に応用していくかが命題の基礎研究。ある程度確立された技術を応用、習得しながら手探りで研究をすすめていくのは戸惑いの連続ですが、腎臓の基礎研究は研究人口も少なくみな同じスタートラインと思って取り組んでいます。」と目を輝かせます。

一番脂が乗った時期に研究を中断することの悔しさ

小林さんは、同じ研究者でもある夫との結婚を機に熊本へ。以前勤務した熊本大学発生医学研究センターに勤務できるようになりました。

以前は結婚・出産は女性研究者にとって足かせと思ってました。「まず、やりたいことがあるのなら結婚・出産は後回しという風潮があり、実際、学会をみても結婚・出産・子育て中の第一線の女性研究者はわずかでした」。

以前は大学院生には「早く産むか、後で産むかしなさい」と言っていました。研究者として一番脂がのってきたときに研究を中断することの悔しさを身をもって体験された経験がいわせる言葉なのかも知れません。

しかし今、熊本大学内では男女共同参画事業が進み、小林さんも恩恵を受けているといいます。女性がどのステージにおいても、安心して子どもを産み、育て、また仕事に復帰できる社会環境が整ってきました。「あとは研究という仕事を“好きであるか”だと思ふ。好きならばあきらめないで。時代は変わっていく。女性だからという考えは持たなくていいのでは？」



共焦点レーザー顕微鏡を用いて観察中

時代は変わる！子育ても研究も全力投球。

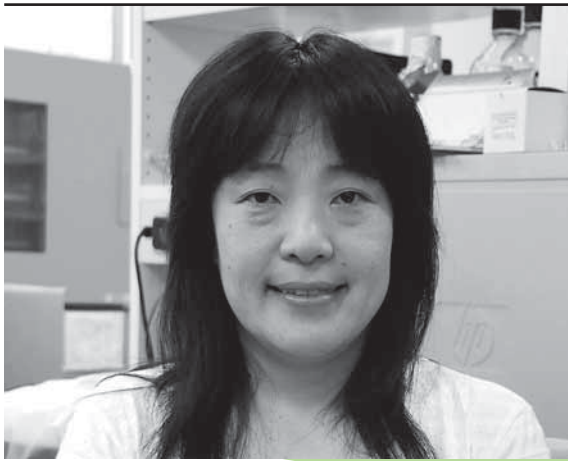
発生医学研究センター 再建医学部門 器官制御分野

助教 斉藤 典子さん

Saitoh Noriko

●プロフィール

- 1987年 東北大学農学部農芸化学科卒業
 1989年 東北大学大学院農学研究科博士課程前期修了、農学修士
 森永乳業(株) 生科学研究所勤務
 1996年 Johns Hopkins University, School of Medicine 大学院卒業
 Ph.D (理学博士)
 1996年 NIH, Cold Spring Harbor 研究所にてポスドク
 2002年 熊本大学発生医学研究センター COE リサーチアソシエイト
 2006年 熊本大学発生医学研究センター 再建医学部門 器官制御分野 助教
 日本分子生物学会 会員



研究を楽しみ、男女で相互をサポート。

自分も何か人の役に立てるのではないかと憧れた研究者の道

ごく幼い頃に、北里柴三郎や高峰譲吉の偉人伝を読みながら、研究者に漠然とした憧れがあったという斉藤さん。大学入学の頃はバイオテクノロジーが脚光を浴びており、応用的な研究で何か人の役に立てる技術や知識が得られるのではないかと憧れたのが研究者を志したきっかけという。

進学した東北大学農学部では、水野重樹先生の研究室に入り、ゲノム構造とDNAの転写調節のメカニズムを解明する研究を学んだそうです。

そして現在、熊本大学の発生医学研究センターで、発生・分化に関わる遺伝子発現調節機構と、細胞核構造の仕組みや機能をテーマに研究が続けられています。少女の頃の想いと裏腹に最先端サイエンスの研究をする斉藤さんだが、「どんな小さな実験でも思わぬ結果が出たり、また予想通りの結果が出たりすると、とてもウキウキしながら家に帰るんですよ」。

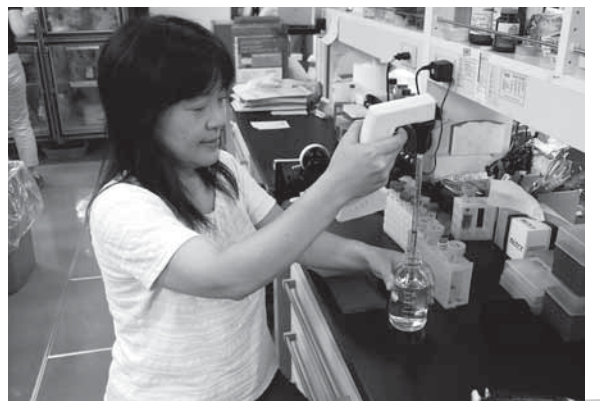
生まれたばかりのひよこが初めて見た、共に分かち合う子育て。

ジョンズホプキンス大学院では、たくさんの女性教授や学生達が研究に専念する姿に驚いたそうです。夫も研究者である斉藤さんと同じようなシチュエーションはめずらしくなかったといいます。染色体の権威で恩師であるビル・アーンショー先生は奥様が研究者で子育て中。当然の如く分担して子育てするその姿に、それが特別なことではなく当然という姿を見て、生まれたてのひよこが初めて見たものを親と思うように、研究者として生まれたばかりの頃に、深い感銘を受けたといいます。「サイエンティストを志すことを励まし、研究者として扱い、育てて下さった先生に感謝していますし、その姿勢に大いに影響を受けました。日本でもそんな生き方が受け入れられる時がくるし、私たちが後に続く人たちのためにつくっていかねばと思います」。

そしてもう一人忘れられないのがアン・プルータ博士という女性ポスドクの存在。大学院在学中に、不安を持つ斉藤さんに親身になりアドバイスをしてくれたそうです。念願のPh.Dを取得したときにお礼をいう斉藤さんに向かって彼女は「私があなたにしたことを、今度はあなたが若い人達に対してする番よ」といったそうです。斉藤さんは今「なんて大きな課題をもらったのだろう」と思うと同時に、それに答えるように学生たちを指導するように努力されています。

子育てと研究の二つの楽しみを持てることに感謝

現在中学生の娘さんがいる斉藤さんですが、「娘たちは男女同等にと教育されてきています。女性も恥ずかしがらずに宣言すれば、思う方向にも進みやすいし助言も受けられます。明確な目標を持つことが大切です。夫、父母達の理解と多大な協力のおかげで、子どもを育てる楽しみと研究の二つの楽しみを持てることに感謝しています。今、男女共同参画が進められてきています。女性が今までとは違った、楽しみながら研究ができる環境と男性と女性が補完し合った新しい生活様式が生まれると思います」。



研究室にて実験中



文学部
教授 **積山 薫**さん
Sekiyama Kaoru

●プロフィール

1976年 お茶の水女子大附属高校を卒業
1980年 早稲田大学教育学科卒業
1986年 大阪市立大学院博士課程終了、文学博士。
ART視聴覚機構研究所研修研究員
金沢大学文学部助手
公立ほこだて未来大学システム情報科学部教授
2006年 熊本大学文学部教授

逆さ眼鏡との出会いから、心理学の研究者へ

心理学というと、ユングやフロイトの精神分析を思い浮かべる人が多いのですが、積山さんは認知心理学の研究者です。もともと理系が好きで、脳の中をのぞきたかった。自分のことを客観的に見たいという思いで早稲田の教育心理学へ進学。そこで牧野達郎教授に出会ったことで、研究者を目指します。

「牧野先生が見せてくれた逆さ眼鏡。その眼鏡をかけると、右手と左手が逆に見えます。右手がこんなに見えるのはおかしい。記憶の右手と違う。ところが、逆さ眼鏡をかけて生活すると数日でその矛盾感がなくなり、数週間で空間のとらえ方も変わります。逆さ眼鏡をかけることで、今までは働かなかった脳の一部が活性化されます。」この実験をきっかけに認知心理学にのめりこみ、これをライフワークにしようと、決意しました。

早稲田大学を卒業後、大阪市立大学大学院へ。とにかく専門書を読み、実験に明け暮れました。民間の情報通信研究所に勤務し、民間の技術者から啓発を受けたことも今日の基礎になっています。

家事に分担はあたりまえ、大学教員の夫に支えられて

その後、北海道で情報系の単科大学「公立ほこだて未来大学」が創設され、教授として赴任。ここで、47才のとき結婚。夫は職場の同僚。「二人とも同じ大学の教員として働いていたので、家事は分担するのがあたりまえでした。」ほこだて未来大学は情報系大学だったため心理学を徹底的に研究したいという学生が少なく、ものたりなさを感じることもあったとか。そんな折、熊本大学から教授の公募に応じて熊本へ。「夫を函館に残して単身赴任しました。北海道に帰るのは、年に5、6回ほど。夫が熊本に来たり、出張先の東京や札幌でおちあうこともあります。相談や連絡はメールとか電話でよくしているので、コミュニケーション不足はそれほど感じません。お互いの仕事をよく理解しているので、さらに高い成果を求めて、言葉ではいいませんが、励ましあっているような気がします。」

認知症の予防にも応用されるか、脳の可塑性の研究

「人の脳は、可塑性を備えています。最近、子どもたちのパソコン・ゲームへの批判がよく聞かれますが、ゲーム習熟者は目標物の検出など、ある種の視覚能力がゲーム初心者より優れているそうです。また、お年寄りの認知症も、コミュニケーション不足や考えることの停止によって、脳の一部の機能が低下してくることも原因と考えられています。

好奇心をかきたて、いろいろなことにチャレンジしていくことで認知症は防げるかもしれません。人間はさまざまな可能性を秘めているのです。脳のどんな機能を計測すべきかというのは、何よりも心理的な行動的データなのです。」積山さんの研究が認知症の予防に役立つことが期待されます。



左右反転めがねのプリズムを通してみると、指輪をしている左手が右手のように見える。

人間の不思議さと可能性を探る心理学の研究。



文学部

准教授 **木村 博子**さん

Kimura Hiroko

●プロフィール

- 1953年 福岡市生まれ
- 1972年 福岡女学院高校卒業、東京芸術大学音楽学部楽理科入学
- 1976年 同大卒業、同大学院音楽研究科音楽学専門課程入学
- 1978年 同大学院修了。修士論文は「モンテヴェルディの第2の作法に関して」。修了と共に郷里に帰り、福岡教育大学非常勤講師。熊本大学教養部助手
- 1980年 熊本大学教養部助手
- 1997年 熊本大学文学部助教、音楽療法研究開始。

音楽療法によって人々を幸せに。

モンテヴェルディの研究で音楽を通した人間探求のおもしろさを知る

木村さんは幼少時から音楽を習い、一般大学か音楽に進むかで悩んだ高校2年のとき、恩師のすすめで芸大進学を決めました。大学では西洋音楽史を専攻し、学部時代は19世紀のオペラ研究、大学院では初期バロックの作曲家モンテヴェルディを研究しました。「ルネサンス期の音楽は古典的な形式でしたが、バロックに移行するにつれ、人間の感情や内なるドラマを音で表す動的な形に変わっていきます。モンテヴェルディはオペラを確立したイタリアの作曲家ですが、人間の様々な心理を的確に音で表現する直感型の作曲家です。彼の研究を通して音楽は人間性のあらゆる面につながっていることを実感しました。」

音楽療法との出会いで、音楽への思いがさらに深くなった

福岡教育大学で非常勤講師をしていた時、熊本大学から教養部助手の公募があり、熊本へ。最初から自分の研究室がある助手としてスタートしました。教養部では初めての女性教官だったので、紺やグレーのスーツを着て目立たないようにしたそうです。国連の世界女性年の制定もあり、働く女性への理解も深まって、男性教官も対等に接してくれました。

「音楽史の研究を中心にやってきましたが、10年前から音楽療法に取り組んでいます。音楽療法は20世紀初頭から欧米で盛んになったもので、日本では単に好きな曲を聴いてリラクゼーションをすることと思われがちですが、本来は病院や福祉施設で行われるより専門的なものです。音楽と人間の深い関係を考えると、それが療法として見直されることはある種の必然であったとも思えるのです。私の中でもコミュニティ音楽療法という、地域に開かれた新しい形の音楽療法を実践研究しています。」

音楽を研究することは、とてもエキサイティングです

音楽のほかにも進むべき道があったのではと自問したこともあったが、音楽の良さが年々わかるようになったという木村さん。研究を続けてこれたのも家族の協力や同僚の理解があったからこそ。「夫は自営業で多忙ですが、できる限り子どもの面倒も見てくれました。また娘は小さい頃身体が弱く、急に大学を休まなければならないことも多かったのですが、そんな時同僚はとても協力的でした。無言のうちの彼らの温かい配慮がなかったら、仕事はとて続けられなかったでしょう。」「家事や雑務に分割され、なかなかまとまった時間がとれないのが悩みの種ですが、睡眠時間を削ってでも研究することはエキサイティングです。音楽は演奏したり聴いたりするのももちろん楽しいですが、人間の探求という視点から研究することにはワクワクするようなたくさんの発見があるのです。」

今年（2008年）7月、木村さんはアルゼンチンで開かれる世界音楽療法会議に出席してコミュニティ音楽療法についての研究発表を行います。「音楽療法的な観点から音楽史を見かえすと、人間にとって音楽とはいったい何だったのかという大きな問題が見えてきます。音楽研究の楽しさは尽きない人間への興味なのです。」

以前はクラシック中心だったという木村さん、最近は童謡や演歌、Jポップや民謡などにまで手を広げて、毎日がますます楽しくなったそうです。



キャンパスで学生と一緒に



教育学部

教授 桑畑美沙子さん

Kuwahata Misako

●プロフィール

1969年 日本女子大学通信教育部卒業
 1972年 日本女子大学大学院修士課程入学
 1974年 熊本大学教育学部講師
 1997年 熊本大学教育学部教授
 2008年 博士号を取得

「女の子だから」の声を逆に原動力にして

鹿児島県生まれの桑畑さんは、高校2年で父親を亡くし、夫の死をきっかけに働き始めた母親と三人姉妹という^{ひとりおや}単親家庭で育ちました。「『母子家庭』だし、女の子なんだから、大学に行かずに働けばいいんだ」という声に負けず、鹿児島県立短期大学家政科に入学します。化学が好きで理系分野の4年制大学に進みたかった桑畑さんに、高校の家庭科の教師が「短大だけど、食物は理系だから、あなたにあっていと思うよ」と勧めてくれたからです。

栄養士の養成課程を修了し、1964年には母校の助手になり、その後取得した管理栄養士の資格を生かして1969年からは保健所の栄養技師として働きました。20代後半になり、将来の仕事について考えた桑畑さんは27歳で仕事を辞め、28歳で日本女子大学大学院家政学研究科に進学します。

家庭科の男女共学を提唱

熊本大学教育学部で家庭科教育に携わってきた桑畑さんですが、1970年代の家庭科は、性によって役割を分担して生きることを前提にした、いわば専業主婦を養成するための女子用の教科でした。そこに性差別が存在することに気づいた桑畑さんは、男女に関係なく生活的自立をめざす教科とすべく、家庭科の男女共学を提唱します。そして、主婦になったときに役立つ知識と技能を教える家庭科でなく、主体的な生活者をはぐくむ家庭科をめざす研究に着手します。

現在も、その研究を、熊本大学赴任と同時に加入した「熊本県家庭科サークル」の仲間たちと続け、例えば「だご汁」のように庶民の知恵と工夫の足跡が学べる、いわば「地域の食文化」に視点をあてた家庭科の授業実践を『食べものを教える』『女と男の未来学』『わくわく食育授業プラン』等の本として出版されています。

2008年3月には、そのような長年にわたる研究をまとめて、栄養学博士の学位を取得しました。

まず、自分から一步を踏み出そう

35歳の時、桑畑さんは非嫡出子を出産されます。乳児保育園に子どもを預けながら、母子ふたりの生活が始まりました。子どもを預けて働く親たちには様々な悩みがあります。お互いに語り合う中でいつしかネットワークができ、助け合いながら子育てできたといいます。しかし、一方でかなりのバッシングも受けたそうです。「今、思うとセクハラだったんですね、その時はわからなかったけど」と振り返る桑畑さん。不登校や「ヤンチャ」を経験し成人した息子の存在に、「子育てを通じて多くの人と出会えし、知らなかった世界を体験できた。なにより私が人間として成長できた。」と、いいます。

多くの子どもたち、若者たちへの桑畑さんからのメッセージは「人にはいろいろなマイナスが降りかかってくる。マイナスだと思ふことでも、それをプラスに転じることはできる。マイナスをプラスに転じて人生を生きて欲しい」。社会が変化するのを待つのでなくて、能動的に動くことが大切だと強調されました。



実習を通して「味噌を作る」授業の意義を話し合う。

「マイナスをプラスに転じる」人生を。



教育学部

教授 鳥飼香代子さん

Torikai Kayoko

●プロフィール

1975年 大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程後期入学
 1980年 熊本大学教育学部講師
 1998年 博士号取得
 1999年 熊本大学教育学部教授

一人の生活者としての感覚を都市計画に活かす。

住空間におけるジェンダーについて学ぶ

江戸時代の面影が今なお色濃く残っている岡山県倉敷市で鳥飼さんは生まれ育ちました。中学生の頃に米国のホームドラマを見ていたら、双子の女の子の一人が都市計画に携わる仕事につきました。その時、鳥飼さんは、女の子が自分の夢を実現していくストーリーにとっても共感しました。育った環境も自由でしたが、鳥飼さんも夢や憧れを持って大学へ進学し、建築を学びます。途中、都市計画から住宅計画へ専攻を移行しましたが、当時、都市計画の方で女子の就職がまだ見込めなかったこともあり、大学院研究室の恩師の勧めで変更したそうです。住空間におけるジェンダー等を学び、先を見越した間取りの共同研究では、DKからLDKへ（Lの提案）の発表なども手がけました。

1980年に熊本に来てから、いわゆる全国統一型の住の考え方を地方都市にそのままあてはめることに無理があることに気づきます。そして、地方都市の住宅理論研究をスタートさせます。具体的には、和室二部屋を続き間にするなどですが、それ以外にも、町文化と農村文化の違いを考慮した住宅計画など、熊本にきて多くのことに気づきました。

ドイツの都市計画を分析して

ドイツ留学を経て、ここ10年くらいは地方（＝熊本）の都市計画に力を注いでいます。高齢者医療費増大というのっぴきならない状況が背景にあったというドイツでは、中心街復活に成功した事例を見てきました。都市の中心の空洞化を修復するには？公共交通の充実？誰もが自由に使える公園などの自治空間の整備？朝市やフェスティバル等生活密着型イベントの定着といったことが必要だということです。閉鎖状況に置かれがちな高齢者層が気軽に中心街に出かけられるような町にすることが何よりも大切なのです。

教育学部地域共生社会課程主任を務めており、＜中山間地域における高齢者の生活圏整備課題に向けて＞というテーマで、ゼミ学生とともに研究に取り組んでいます。甲佐町と菊池市をフィールドにして、バリアフリー住宅にむけての改築行動、徒歩圏、生活関連施設等の検討を通して課題を明らかにするというのがその内容です。

未来を担う子ども達のために

また、3年前からは、グリーン・ツーリズム、ブルー・ツーリズムといった体験型ツーリズム（交流）活動を続けています。子ども達が農山村や漁村でスロライフを体験することによって何かが変わっていかばと願っています。ご自分の子育ては時間的にも体力的にも全く余裕がなかったそうですが、未来を担う子ども達のために、大切なものを少しでも伝えていきたい。「一人の生活者として自分の生活する地域に根差し、そこで起こる様々な問題や課題を共に考え、共感し、問題の解決に臨む人間でありたい」。鳥飼さんの情熱に触れた思いがしました。また、研究者を目指す人たちへ「多岐にわたって、とにかく本をたくさん読み、いつも考えること」というアドバイスをいただきました。



「日本学生支援機構の帰国留学生」事業として、台湾の「南榮技術学院」へパソコンとプロジェクターの贈呈をしている。



教育学部

教授 坂下 玲子さん (保健体育科教育)

Sakashita Reiko

●プロフィール

1978年 福島大学教育学部入学
 1982年 筑波大学大学院入学
 1985年 熊本大学教育学部赴任
 2008年 熊本大学教育学部教授

自分の変化を楽しむ

教育学部小学校教員養成課程・中学校教員養成課程等で、体操とダンス等の実技指導と保健体育科教育を指導されている坂下さんは、福島県会津若松市のご出身です。

「将来は小学校の先生になりたい」と、地元、福島大学教育学部に入学。中学・高校・大学と、ずっと新体操を続けてきた坂下さん。「各種大会に出場し、好成績を残したい」と、上を目指し練習に励む毎日でした。「練習を通して新しい技術を習得し、自分の体や動きが変わっていくことを体感できるのが楽しかった」と。

スイスの世界大会に参加

1980年、大学3年生の時に転機が訪れました。新任の先生との出会いから、ワールド・ギムナストラダ（世界体操発表会）の存在を知ります。1953年に始まったこの大会は4年に1度開かれていて、ヨーロッパを初めとした世界各国の参加者たちが採点競技ではない体操やダンスを発表する世界的な体操の祭典です。次回が1982年、チューリッヒ（スイス）大会だと聞き、「ぜひとも出場したい」と思うようになります。そして、筑波大学大学院に進学し、在学中にワールド・ギムナストラダへの参加を果たします。開催地のスイスには、子どもから大人まで幅広い世代のクラブチームや大学が集い、それぞれが楽しんで演技を披露する様子に坂下さんは感銘を受けます。「それまで、スポーツはレベルの高さを競うものとはばかり思っていました。勝敗や競争以外に、楽しむ世界があったことを目の当たりにして、それは本当に新鮮な驚きでした」。

参加者のみならず、観客や街を挙げての楽しげな様子も印象的で、「スポーツは一部の人のためのものではなくて、どんな人にも楽しみや喜びを与え、生活や人生を豊かにする」ことに気づかされます。そして、体操やダンスの奥深さをもっと勉強したいと思うようになったそうです。

リズムカルで全身的な動きを心理面から分析

「大谷武一の体操論とその影響についての一考察」「リズムカル・ムーブメントにおける美的体験についての検討」（共著）等の論文をまとめられている坂下さん。

2005年には「子どものボディセンスを伸ばす本」を山海堂から出版されています。現在は、数値で表すことの出来ない体操やダンスの動きの質を動作分析や心理面からの分析など、「多方面から“動きの世界”に迫ってみたい」と目を輝かせます。私たちは運動することによって、達成感ばかりでなく、人との関わり方を学びます。運動には、子どもたちの社会性や感受性を育てる側面があるのです。小学校の先生になるのではなく、子どもたちを育てる教育者を指導養成する仕事に就かれた坂下さん。

「人生、何が起こるか分からない。私もそうでしたが、生きていく中では色々な所に分かれ道があります。そんな時、人任せにはしないで、自分で自分の道を選び取って欲しいですね」。若い人たちに向けて、そんなメッセージをいただきました。



第50回熊本県学校ダンス発表会にて、学生とともに(2008年2月)

動きの楽しさと美しさを伝えたい。



教育学部

教授 袴田 和泉さん

Hakamada Izumi

●プロフィール

- 1981年 東京芸術大学大学院修了
- 1982年 ハンガリー国立フランツ・リスト音楽アカデミーに留学。
- 1988年 ドイツ国立フライブルグ音楽大学大学院ソリストコースを最優秀の成績で修了。
- 1991年 日本大学芸術学部非常勤講師、国内外で演奏活動を続ける。
- 1999年 熊本大学教育学部赴任
- 2008年 熊本大学教育学部教授

ピアニストとして音で語りかける。

オーケストラをバックに演奏をするのが夢

戦前に活躍した、童謡歌手を母に持つ袴田さん。「小さい時から歌の絶えることのない毎日でした」。父は家庭の事情で医者になる夢を断念したことから、勉強のよく出来た袴田さんに夢を託していました。5歳でピアノを習い始めますが、「音楽よりも医学を」という父にすぐにピアノを買ってはもらえず、2ヶ月間は一所懸命紙鍵盤で練習したそうです。小学1年生の時に「オーケストラをバックに演奏するピアニストになりたい」と作文に書くくらいピアノを弾くのが好きだった袴田さん。中学時代からは本気でピアニストを目指します。東京都立芸術高等学校ピアノ科から東京芸術大学、同大学院へと進み、ピアノの研鑽を積みますが、「もう少し自分のために勉強しなくちゃ」と、海外に出る準備をします。小学校5年生から近所の牧師館で英語を習っていた袴田さんは、大学在学中にはフランス語とドイツ語を勉強し、海外留学に備えます。

ハンガリー留学でラドシュに学ぶ

大学院修了から1年後の1982年、ハンガリー政府給費留学生としてハンガリー国立フランツ・リスト音楽アカデミーに留学します。何のコネクションもないまま、袴田さんはフェレンツ・ラドシュの門をたたきます。断られても引き下がらず弟子になります。本当に厳しいレッスンだったと振り返ります。

日本でピアノを習っていた時には、先生に言われたとおりに弾かなくてはならなかったため、次第に自分の意見を持たなくなってしまったのだそうです。先生が弾いたとおりに弾けるのに「この曲についてどう感じるのか、それを言ってごらん」と聞くラドシュに答えることができず、自分を根底から覆されました。しかし、ラドシュに師事できことは「大ヒットというよりホームランです」と袴田さん。「ラドシュ先生は真に実力のあるピアニスト、そして正真正銘の芸術家ですから」。

3年後、袴田さんはハンガリーからドイツに渡り1988年国立フライブルグ音楽大学大学院ソリストコース修了。最優秀の成績でドイツ芸術ソリスト国家試験に合格しますが、家庭の事情もありその1年後には日本に帰ることになります。

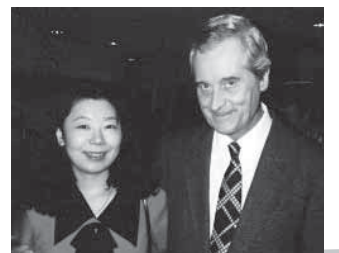
全国でピアノリサイタルを開催

1990年、帰国した袴田さんは、逆カルチャーショックの中で1年間は仕事にも就けず精神的に辛い日々を送りました。熊本大学に赴任されたのは1999年。同時に日本大学芸術学部非常勤講師としても後進の指導にあたりました。

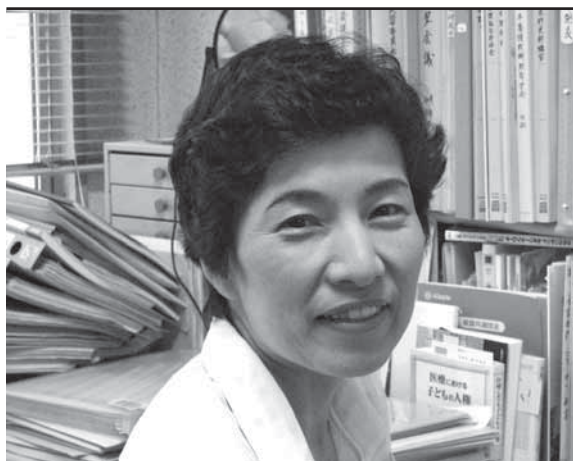
1990年の帰国後も引き続き毎年、ドイツ、スイス、東京などでコンサートを続けていますが、2000年から2005年にかけて『スクリャーピンの人生と音楽を追って』と題し全10曲のピアノ・ソナタをメインにしたリサイタル・シリーズ全6回を成功させました。熊本でも2006年ピアノリサイタルに続き2008年9月にはチェロの小澤洋介氏、バイオリンの三戸素子氏とともに袴田和泉ピアノトリオ名曲の夕べを開催しました。

「私はなによりもまずピアニストなので、音でちゃんと語りかけていきたい。どんなことがあっても弾き続けたい」と語ります。

学生たちには「何かひとつの事を極めて」と思う日々です。「自分に与えられた使命を見出し、そこでたゆまぬ努力を続け、人間として深みのある人になって欲しいです」。



室内楽の師のボトヴァイ先生と



教育学部

准教授 **本田 優子**さん

Honda Yuuko

●プロフィール

- 1982年 熊本大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程入学
- 1986年 千葉大学大学院看護学研究科修士課程精神看護学専攻
- 1988年 熊本大学教育学部助手
- 1993年 夫の仕事のため退職し東京へ。
- 1994年 再び熊本大学助手
- 2002年 熊本大学社会文化科学研究科で公共社会政策学を学ぶ。
- 2005年 博士号取得 熊本大学教育学部助教授

人の心の問題に関心を持って

思春期の心の健康問題と子どもの権利（人権）について研究を続けてきた本田さんは、教育学部養護教諭養成課程で教鞭をとっています。専門は「学校における医療的ケアの教育」「思春期の子どもの権利擁護」「保健学習及び保健指導の方法」。養護教諭とは、誰もが世話になった経験を持つ保健室の先生のことです。本田さんは子どもの頃から引っ込み思案で、うまく人と話せず、「そんな自分を変えたい」という強い思いがあり、人の心の問題に関心を持つようになりました。1982年、熊本大学教育学部に入学。学部時代の経験では精神科の実習が特に難しかったため、本田さんは精神看護学を学ぶため、大学院に進学します。

子どもの幸せと健康に役立つ研究を

千葉大学大学院生時代にはいろいろな人との出会いがあり、振り返ってみると充実した年月でした。思春期外来の実習では、毎回必ず反省会があり、そこで学んだことはとても大きかったそうです。2年間、毎週、本田さんは通院する子どもたちと話し、ゲームをして遊び、絵を描いたり箱庭を作ったりという実習経験を積みました。それまでは子どもが好きというわけではありませんでしたが、この経験が子どもの心の美しさや可愛らしさに気づかせてくれたそうです。「思春期外来での実習経験から、自分に自信が持てるようになり、子どもに寄り添うことができるようになりました」と。現在に至るまで「子どもたちの健康と幸せに貢献出来る研究を続けたい」という思いはずっと変わりません。

生涯学び続ける

「中学生とその親世代における人生に対する価値観と親子関係」「高校生女子のやせ願望とその背景」等々、本田さんは多くの論文をまとめられています。2005年には『思春期の子どもの意思決定—現代医療におけるケア的視点の必要性—』という研究テーマで博士号を取得します。また、「心の健康」「コミュニケーション技術」「ストレスと健康」と題して講演も行っています。モットーは、「何事にも真摯に取り組むこと」。下のお子さんが保育園年少になったのを機に、熊本大学社会文化科学研究科の第一期生として博士課程後期入学します。そして、お子さんの保育園卒園と同時卒業を目標に、公共社会政策学を学び、無事3年間で博士号を取得。自分の学んだことを社会に還元していくためには、どうしても博士課程に進む必要があったといいます。「夫と上の子どもの協力もありましたし、周囲に助けられながらの毎日でした」と微笑む本田さんですが、「一丈の堀を越えぬもの、十丈二十丈の堀を越うべきか」という教えにずっと励まされてきました。苦しい時にはこの言葉を思い、とにかく最優先の課題・問題から目をそむけずに、ひとつひとつ取り組んでいくよう心がけているそうです。



心の問題から社会へ研究を広げ、皆を幸せに。



教育学部

准教授 **八幡(谷口)彩子**さん(家政教育)

Yahata(Taniguchi) Ayako

●プロフィール

- 1985年 熊本高校卒業
- 1991年 お茶の水女子大学大学院家政学研究科修了
県立鹿本農業高校勤務
- 1993年 尚綱短期大学家政科に勤務
- 1996年 熊本大学教育学部専任講師
- 1999年 熊本大学教育学部助教授

生きた家政学で働く女性をサポート。

家政学とは、実践的総合科学

家庭科と言えば食物や被服などモノを扱う教科という認識が一般的、男女ともに家庭科を学ぶようになった現在でも、その傾向は続いています。

高校教師の勧めでお茶の水女子大学家政学部へ進み、家庭経営学を専攻しました。「家政学」は、家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について、自然・社会・人文の諸科学を基盤にして研究する「実践的総合科学」です。

大学3年生の時、八幡さんは亀高京子先生と出会います。学外から非常勤講師としてお茶大に來られた先生ですが、この亀高先生の生き方と研究スタイルが八幡さんのそれからのロールモデルとなります。

翻訳家政書の研究で博士号を取得

1991年にお茶の水女子大学大学院家政学研究科を修了し、帰郷。県立鹿本農業高校、尚綱短期大学家政科で教鞭をとります。そして1996年6月から熊本大学教育学部へ。「3年で学位(博士)をとる」というのが採用時の条件だったそうです。「明治初期における翻訳家政書の研究」で、1999年に博士号を取得しました。

その後、結婚、出産を通して、八幡さんに変化が訪れます。妊娠中のつわりから始まってその後も体調不良が続き、思うように動けない状態に。

八幡さんには、現在小学生になる双子の女の子のお子さんがいらっしゃいます。この取材時にも一人のお子さんが入院中でしたが、子どものいる家庭では当たり前のこととはいえ、働く母親にとって、育児は時間との戦いといった側面を持つことは否定できません。しかしながら、職場結婚だという「夫の協力が大きかったです」と振り返ります。また、研究面でも、文学部出身の夫から学ぶところがあり、まさに生きた家政学を実践中です。

次世代の研究者育成のために

妊娠・出産に伴う体調不良を経験しながらも、八幡さんは「若手研究者が読む『家政学原論』2006」の編集に携わりました。同世代の女性研究者が力を合わせて執筆するのにほぼ10年かかりました。そして、2007年度の亀高学術出版賞を受賞されました。

また、女性研究者の多くは結婚しても子どもを持たないという状況です。ご自分の経験を生かし、熊本大学次世代育成支援キックオフシンポジウムでは「経験を通して子育て支援を考える」というコメントをされ、働く女性たちの力になりたいと考える日々です。



科学技術振興調整費(女性研究者支援モデル育成)による視察で
母校お茶の水女子大学を訪れて



教育学部

准教授 **國枝 春恵**さん (音楽・作曲家)

(国枝 春恵)

Kunieda Harue

●プロフィール

- 1983年 東京芸術大学大学院作曲専攻修了
- 1986年 タングルウッド夏期講習給費研修生
- 1996年 熊本大学赴任
- 1998年 熊本大学教育学部准教授
- 2003年 文化庁特別派遣在外研修員

吉田茂首相の国葬でピアノを弾く

音楽家の父とその弟子である母。音楽的環境の中で生まれ育った国枝さん。日曜日には、讃美歌を歌いながら教会への坂道を家族全員で歩きました。3歳半から父の手ほどきを受け、4歳で桐朋学園子どもための音楽教室に入室しピアノとソルフェージュを習い始めます。ピアノは有賀和子氏に師事し、順調に才能を伸ばし、数々のオーディション、公開演奏会にも出演するようになります。9歳の時には吉田茂首相国葬のTV特別番組でモーツァルトのピアノソナタを弾きました。

音楽教室では最優秀のクラスの生徒に、夏休みの作曲の課題が出されました。とにかく国枝さんはこの課題が楽しみで楽しみでしかたなかったといいます。小さい頃から絵を描くことが好きで小学校では美術クラブに入り絵画コンクールで入賞も。自分の感覚を存分にはばたかせることの楽しさに取りつかれていました。小学校の卒業アルバムに「将来は作曲家になりたい」と書いていたそうです。

演奏から作曲の道へ

周囲の期待の中で桐朋女子中学に進んでからもピアノひとすじでしたが、音楽界の派閥争いを経験すると同時に、瞬間芸術の怖さを知るようになります。そしてショパンやドビュッシーとの出会いを通して、ますます作曲に傾倒していきます。都立芸術高校ピアノ科に入学した国枝さんは、日本にフランスの音楽教育を本格的に導入した、作曲界の大御所である池内友次郎氏からプライベートに作曲を習い始めます。

その後、東京芸術大学作曲科から同大学院音楽研究科作曲専攻へと進み、1983年に修了。学生時代は体力的にも精神的にもキツかったとおっしゃいますが、一方で前衛音楽からジャズに至るまで様々な音楽との出会いの時代でもありました。大学4年時から作品発表を始め、コンクール入選も果たしますが、合唱曲では国枝さんの言葉に対する感受性の豊かさが発揮されます。1986年に現代音楽祭等も有名なダングルウッド夏期講習給費研修生として過ごした2ヶ月間が国枝さんの転機になったそうです。

研修生仲間から「なぜこのように書いたのか。何かシステムはあるのか」という質問に十分に答えられない自分。国枝さんは作曲をする自分を見つめ直し、問い直します。そうした結果、ロジカルな音列技法と自分の感覚を結びつける手法を手に入れます。

〈地上の平和〉が世界初演

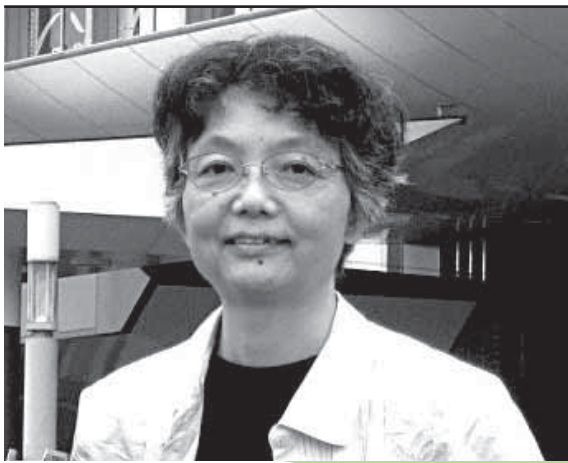
1996年、国枝さんは熊本大学に赴任します。現在は後進の指導ばかりでなく、地元での音楽活動にも力を入れています。2003年に倒れ、翌年亡くなった父親の闘病中に作曲した曲が《レヴェレーション》(2004) ヨハネの黙示録の中の数字による構成というのですが、「父に聴いてもらうことはできませんでした」。この曲は、今年、熊本県立美術館本館で初演された朗読劇「光の道を～ガラシャ殉教」の音楽にも使われました。2005年にはN響 Music Tomorrow 委嘱作品《地上の平和》が世界初演されました。

作曲家であり演奏家であるという二者間を行きつ戻りつしながら進化を遂げている国枝さん。「人を驚かすのが好き」という。「現代音楽は、演奏や解釈が難しいと、今は言われてもいい。50年後あるいは100年後に、面白くてすごくいい曲だと、多くの人に演奏してもらえそうな曲を作りたい」と言って瞳を輝かせました。



高千穂にて

100年後の人々を驚かせ喜ばせる作曲を。



教育学部

准教授 古田 弘子さん

Furuta Hiroko

●プロフィール

- 1982年 大学で英語を学び卒業。
- 1984年 大阪教育大学特殊教育特別専攻科で学んだ後、出身地の岐阜にある難聴幼児通園施設にて勤務。退職後、筑波大学大学院入学。
- 1993年 同大学院修士課程修了し博士課程に進むが、JICAの派遣でスリランカへ。
- 1999年 筑波大学大学院博士課程修了。熊本大学教育学部に勤務。熊本大学教育学部助教。

海外で働く、自分の可能性が広がる。

自分の力で成長したい

大学で英語を学ばれた古田さんは、卒業後、大阪教育大学特殊教育特別専攻科で学び、地元の岐阜で難聴幼児通園施設に勤務されました。当時は、仕事をする女性のロールモデルがあまりなく、どのような仕事をしていくか悩む中で障害児教育に出会ったそうです。毎日、ジャージ姿で仕事をした職場は、10人中9人が女性職員でした。耳の聞こえない幼児にコミュニケーション手段を身につけさせる教育とその親へのケアが仕事内容でした。そこでは、経験豊かな素晴らしい女性上司と出会い、ずいぶんきびしく鍛えられましたが、その職場にいる限り、どうしても上司に頼ってしまう自分に気づきます。そして「もっと学びたい、自分自身の力で成長したい」と思い、退職して大学院へ進みます。

アジアの障害児教育の道を開く

32歳で筑波大学大学院に進学、修士課程を修了し、同大学院博士課程に進んだ1993年、古田さんはJICA（Japan International Cooperation Agency・国際協力機構）からスリランカへ派遣されます。スリランカでは2年間、国立教育研究所に勤務しました。そこでの仕事は、ひとつには耳鼻科のない田舎へ行き、子どもたちの聴力検査を行うことでした。防音室もなく、お寺を借りて検査をしたそうです。もうひとつは、聴覚障害児を持つ親たちに向けて「障害があっても教育は受けられる」という内容の啓発ビデオを制作する仕事でした。スリランカでも尊敬できる上司との出会いがありました。スリランカのような貧しい国で、「どんな子どもでも教育を受ける権利がある」と情熱を持って仕事に取り組む姿から、古田さんがこの道でこれから生きていくための勇気をたくさんもらったそうです。そして、それ以外の多くの人々との出会いを通して、ますますスリランカを理解するようになり、好きになっていったといいます。それ以来ほぼ毎年スリランカを訪問し、日本であまり行われていないアジアの障害児教育の研究を開拓してきたそうです。

学生からも教えられる

「従順でおとなしい」「いい子」は日本人女性の特徴と言えますが、海外に出て仕事（ボランティアでも同様）をしてみると、そういった特質は役に立たないといいます。ですから、自分自身の力量や可能性を広げるためにも、「一度、海外に出てみることを勧めます。自分自身の新たな面を発見できますから」と。現在、教育学部で特別支援教育教員養成に携わっていますが、大学教員という仕事は、学生から新しい発想を得て、一緒に学べるところが良いとおっしゃいます。しかしながら、大学という職場は未だに男性中心にまわっているところがあり、女性差別に立ち向かう強さも女性研究者には必要だそうです。そういう中で、女性教員とのネットワークを少しずつ構築するように努力しています。また、山歩き、ジョギングが趣味で、11月1日の阿蘇遠歩には毎年参加しています。



スリランカ、北西部州社会事業局運営の障害児通園施設を訪問して



教育学部

准教授 河野 順子さん (国語教育)

Kawano Junko

●プロフィール

- 1980年 北九州市公立小学校に赴任
- 1991年 現職派遣として兵庫教育大学大学院学校教育研究科へ
- 1993年 同修士課程修了
- 1995年 広島大学附属小学校文部教官
- 2000年 兵庫教育大学大学院博士課程入学
- 2001年 兵庫教育大に籍を置き、広島大学大学院教育学研究科に特別研究生として編入。
- 2003年 博士号取得
- 2004年 熊本大学教育学部助教授

実践と理論のフュージョン

生まれ育った福岡の地で国語科教育を学んだ後、小学校の教師になった河野さん。二校目に赴任した小学校がいわゆる教育困難校でした。いじめ問題ばかりでなく、学力はあるが人とうまく関わることが出来ない子どもたちを前にして、「この子どもたちを育ててあげられない」と感じ、教育の在り方と非力さの壁にぶつかります。そして、「理論を学ばなくては」と、決心をします。

公立小学校教員という立場のまま、現職派遣という形で、兵庫教育大学大学院に進みますが、ここで出会った中冽正堯（なかすまさたか）先生の実践は大きいものでした。教育において「実践と理論をどう統合させていくか」という今日の問題に、以後、ずっと関わり続けることになります。

子どもの言葉の力を育てる

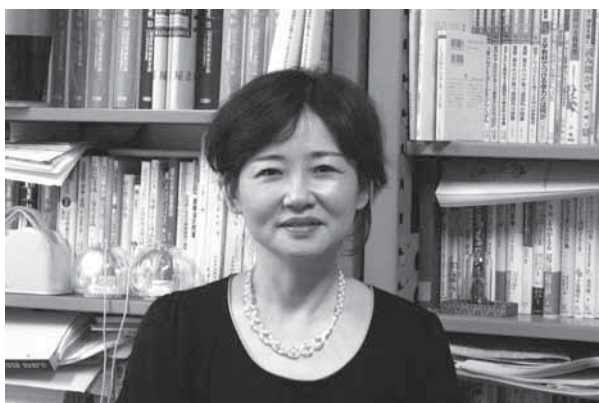
『＜対話＞による説明的文章の学習指導—メタ認知の内面化の理論提案を中心に—』は、2005年度に日本学術振興会からの出版助成を受け、博士論文を公刊したものだそうですが、河野さんの研究のあり方は一貫しています。実践（教育）現場に自ら出向き、「実践から学びながら理論を塗り替えていく」という姿勢です。そして、論理的思考力や批評力を育成する授業のあり方を臨牀的に明らかにしています。

未来を担う子どもたちの言葉の力を育てることを使命と感じ、現場に生かせる理論を構築していくためにも、「常に現場教育に参与し続ける研究者であるように」という姿勢で研究を続けていらっしゃる河野さん。幼小中高等学校現場で授業研究会講師を務め、国語教育研究会での講演など、市と県を含めた地域との連携を図っていくことにも力を注いでいます。2004年に熊本大学教育学部にいらしてからは、20名ほどの小・中学校の先生方と共に「国語教育湧水の会」の月例会を開いて学び合っていますが、これには熊本大学の学生も参加し学んでいます。

学生とともに育つ

「私、単身赴任なんです。もう毎日、夫と長距離電話してます」という河野さん。夫とは専門が同じだということで、毎日の会話が河野さんのリラックス法であり、元気のもとにもなっているようです。「教育はとても魅力的な世界です」と、河野さん。子どもたちの未来を育てる重要な仕事であることはもちろんですが、「与えるばかりではなく、関わり合うことの出来た子どもたちと共に自分も成長出来るところがこの世界の一番の魅力」とおっしゃいます。

熊本大学の授業では専門の「学習指導理論」を通して、「論理的思考の育成」を目指し、一方では、＜対話＞概念を用いた学び論及び対話型スピーチを授業に導入しています。そこで「内なる言葉」「私の言葉」を発見していく学生たち。「人と共同して新しい言葉を作り出していく」こと、言葉によって心を通わせ合う喜びと感動を、学生たちと分かち合う日々です。



研究室で

実践に学び、
国語教育理論を塗りかえていく。



教育学部

准教授 **雙田 珠己**さん

Souda Tamami

●プロフィール

1980年 埼玉大学教育学部を卒業後、商品科学研究所入社
 2000年 東京学芸大学大学院修士課程入学
 2005年 博士号取得
 2007年 熊本大学教育学部准教授

障害者の願いをかなえるために。

衣料品の商品開発を手掛ける

雙田さんは1980年から19年間、セゾングループが出資する民間研究所に勤めました。当時は、大学に残ろうとは全く思わなかったといいます。学生時代に被服材料学を学び、商品科学研究所では、退職衣料（タンスの肥やし）、ローティーン衣料などを研究し、衣料品の商品開発を手掛けました。時代はちょうどバブルの頃で景気がよく、ふんだんに研究費が使える夢のような日々でした。「周囲の人たちも有能で自由で、実に刺激的な日々でしたね」と、雙田さん。初代所長が三枝佐枝子さんと、「女性を大切にしてくれる会社でした」。しかし、バブルがはじけ、1973年から続いた研究所も1998年にセゾン総合研究所に合併。その後、大学院で学び、2007年に熊本大学に赴任されました。雙田さんは単身赴任で、ご主人と大学生と高校生の二人のお子さんは東京で暮らしています。

障害者の衣生活をテーマに研究

繊維が好きだという雙田さん。「顕微鏡で見た繊維の世界があまりに美しかったですよ」。しかし大学では繊維学（物質としての繊維）ではなく、繊維の消費性能（洋服など、身につけるものとしての繊維について）を学びました。研究所では万人を対象とした機能性の追及を目指してきたわけですが、大学院入学に際し、当時はできなかったマイナーな人たちに目を向けようと思いました。そして「運動機能に障害がある人の衣生活」をテーマに決めて、修士から博士まで同じテーマで研究を続けます。

「たくさんの方が関わってくれて、この研究は形になっていくんですよ」と、雙田さん。中でも、雙田さんは子どもたちに目を向けます。肢体不自由特別支援学校へ通い、「どうやったら着やすくして負担の少ない服を作ることができるか」ということを考え、実際に心拍や身体の動きを数値化して快適度を測ることをしました。また、どんなに障害が重くても生活者として自立するように、介護者を含めての衣生活教育をしてきました。

障害者の自立のために

障害のある子どもたちに、どんな服が着たいかを尋ねると、必ず「みんなと同じ服が着たい」という答えが返ってくるそうです。障害の有無に関係なく「何が欲しいのか、何が着たいか」がわかることは、生活者として自立するうえでとても大切な感覚です。自分で着られないから、介護者に着せられるがままの毎日を過ごさざるを得ないから、「こんな服が着たい」「こんな風に着たい」といった欲求を言えなくなるそうです。そんな欲求を持つことに罪悪感を感じたり、欲求があることを忘れてしまうという現実があります。ですから、子どもたちだけではなく、親など、周囲の大人たちを含めた衣生活教育が必要なのだそうです。「研究所時代には、モニターや被験者を人の感覚を測定する機器のようにとらえていた気がします。けれども、現在は、障害がある方の多くが、ご自身の衣生活を改善したいと強く願って協力してくださるせいか、人同士のつながりの中から私の方がパワーをもらっていると感じます」。ですから、研究を続けるうえで「決してひとりではない」というふうに思える。それが雙田さんに勇気を与え、熱く動かし続けるのです。



特別支援学校でのアクティビティ



教育学部

准教授 飯野 直子さん (理科教育)

Iino Naoko

●プロフィール

- 1994年 鹿児島大学教育学部卒業
- 1996年 同大学院教育学研究科修士課程修了
同大工学部教務職員
- 2005年 同助手
- 2007年 同助教
熊本大学教育学部准教授

キュリー夫人の伝記を読み、科学者に憧れる

小学校入学前に鹿児島へ。幼い頃から生きものや自然の様々な現象に興味のある子どもで、小学生の頃にキュリー夫人の伝記を読み、科学者に憧れたといいます。

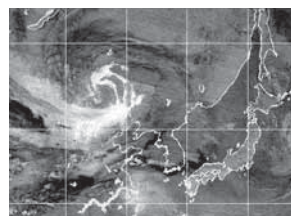
将来を考え始める頃から先生を目指すようになり、そして鹿児島大学教育学部に進学。学部時代、卒業研究が楽しくてもっと勉強したいと、修士課程へ。「運がよかったんです。修士課程修了時、工学部で教務職員の口があって採用になりました。所属研究室で新しいテーマに挑戦させてもらったり、自分の研究テーマを学生さんたちと一緒に研究したりすることができました。多くの先生方のおかげさまで2004年に博士(工学)を取得することができ、翌年には憧れていた研究職につくことができました」。2007年11月から熊本大学教育学部へ。2008年7月に研究室に学生が配属され、これからまた学生と一緒に研究ができるのがとても楽しみだといいます。

結婚後、鹿児島から熊本へ引っ越すとき、退職するしかないと考えたそうですが、当時の鹿児島大学機械工学科の学科長のアドバイスで土宇から新幹線通勤し、仕事を続けることができました。「女性が仕事を続けやすい環境を作っていただいた先輩方に心から感謝しています」と飯野さん。

九州大学の教授との共同研究も

飯野さんの専門は「広く括れば環境科学ですね」。『衛星リモートセンシングを使った環境解析』ということですが、現在は、九州大学の鶴野教授とともに、黄砂の予測精度を上げるための研究も始めています。衛星画像を使うと、中国内陸部の乾燥地帯で発生した黄砂が大気中を移動してくる様子を時系列で見ることができます。その情報をモデルに組み込むことによって黄砂予報の精度を上げることが可能になります。

その他、熊本大学教育学部で挑戦したい研究テーマはたくさんありますが、その中の一つとして、今後、学生さんたちと一緒に熊本のヒートアイランドを調べてみたいと思っているそうです。



2007年3月31日1時のMTSAT熱赤外差画像(大陸上の渦状の白い部分が黄砂)

理科の教師は一人一芸

小学校でも大学でも、教員の「すごく楽しい」という態度は必ず子どもたちに伝わるもの。それまで、あまり興味もなかったことが、だんだん面白そうに見えてくるような経験。教育の持つ一つの可能性がそこにあるような気がします。

「理科の教師は一人一芸」は、学部時代の恩師の言葉で、今後、研究室のスローガンにしたいといいます。教育学部の学生は、幅広くいろいろなことを学ばなくてはなりません、卒業研究を楽しみ、そして極めましょう。そうすれば、別の分野や新しいテーマ、その他のいろいろなことにもうまく対応できるはず。

鹿児島大学工学部から熊本大学教育学部へ来られた飯野さんは、もうひとつの夢であった教育に関われることがとても嬉しいそうです。「現場の先生にはありませんでしたが、先生を目指す学生たちの教育に関わることが出来ることは、すごく幸せです。自分の研究も含め、これから学生と共に様々なことにチャレンジしていきたい。熊本の理科教育に、研究した全てを生かせるような方法を考え、学生と一緒に頑張っていきたい」と、抱負を語ってくださいました。

「理科って楽しい」を、ひとりでも多くの人たちに伝えていけたらと思う毎日です。

「理科って楽しい！」を伝えたくて。

大学院法曹養成研究科

准教授 **若色 敦子**さん
Wakairo Atsuko

●プロフィール

- 1978年 専修大学法学部入学
- 1990年 専修大学法学研究科博士後期課程修了
14年間、九州共立大学で教鞭を取る。
- 2004年 熊本大学法科大学院准教授



経営に役立つ法律の研究を。

渡辺一夫氏に啓発されて

若色さんは子どものころから読書が好きで、一生本を読んでいられる職業に就くのが目標でした。高校3年生の頃、渡辺一夫氏の「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか？」という評論を読み、この問いかけははずっと考え続けなければならないと思いました。同じ頃、政経の授業が面白くなり、法学部を目指すことにしました。専修大学法学部では、ふとした偶然から入った商法演習（加藤勝郎ゼミ）が、実はかなり面白く、毎回ハードな討論を繰り返しているうちに、商法をもっと研究してみたくなりました。また、このゼミに入ったことがきっかけで、関東学生法学連盟（関法連）の法律討論会に参加することになり、3年生の時に質問賞（商法）を、翌4年生では全日本学生法律討論会（全討）で優勝を手に入れます（民法）。すでに大学院進学は決まっていたのですが、本格的に研究者を目指すと考えたのはこれがきっかけだったのかもしれません。

大学時代も、商法の研究者をめざすようになってからも、先の「寛容は…」については時々考えることがあります。自分の考え方の基本には常にこの問いかけがあるように感じています。

研究を経営に活かす

1990年、同大学法学研究科博士課程を修了し、九州共立大学に就職。その後14年間同大学で教鞭をとり、2004年、熊本大学に赴任しました。現在は主に、法科大学院の会社法の講義と、法学部の商法演習とを担当しています。「熊本大学の学生は勉強熱心ですね。まあ、私が見ている学生は、皆、目標があって学んでいるわけですから、当然なんです」。また、熊本経済同友会の企画で発足した「熊本MLO」にも参加。これは、文系大学教員の研究を企業経営者のマネジメント相談に活かすこと、大学側は経営現場における課題やニーズを現在進行形で研究に生かしていくという協力体制のもと運営されています。若色さんが特に力を注いでいच्छるのが中小会社の会社法です。特に中小会社では、問題を抱えていても内実が表面に出て来ないことが多く、会社法が内紛時にかえって口実として使われ易いといいます。会社法が不当な形で使用されたような様々な場面に機敏に反応していき、内紛を未然に防ぐような法整備の必要性を感じています。

石の上にも三年

1985年頃から約5年間、大学院の講義を受けながら法律事務所で働いていましたが、実務において、持ち前の読解力がとても役立ったそうです。また、「少なくとも社会学者は、専門知識を持つことは当然としても、それ以外のさまざまな分野の本を読んでおいた方がいい。そして、何事に対してもいったん疑ってみることも大切だ」といいます。絵画、文学にも造詣が深く、ご自分でも創作することも。趣味で5年以上エアロビクスや筋トレなどのフィットネスを続けている若色さん。「どんなことでも、3年続けることができたならどうにかになります」。慣れ親しんだ福岡から熊本に通う毎日です。



法学部の学生有志とキャンプ旅行



大学院社会文化科学研究科

准教授 岩田 奇志さん

Iwata Kishi

●プロフィール

- 杭州大学（現浙江大学）で日本語を学ぶ。
1989年 北京外国語大学大学院日本学研究中心卒業後、清華大学外国語学部で教鞭を執る。その後、結婚して来日。
2001年 名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程入学
2004年 経済学博士号を取得。中国及びマレーシアの経営問題を研究する傍ら、日本福祉大学で非常勤講師を勤める。
2008年 熊本大学大学院社会文化科学研究科准教授として、単身赴任中。

その後の人生を決めた日本語との出会い

中国出身の岩田さんは、母国での大学受験の時、外交官を目指し英語専攻を希望しました。しかし、体が小さいので日本語を勉強してはどうかという面接官の意見で日本語専攻に変更。「それがその後の私の人生の方向を決めることとなりました。今日、熊本大学の恵まれた環境のもとで仕事ができるのもその一つの結果です。何が幸いするかはわかりませんね」と笑う。

大学を卒業後、北京外国語大学大学院に進みました。中学生時代から、北京大学で哲学を学び、合肥工業大学で教鞭を執った父と、経済に詳しい兄との討論を聞きながら育ったという岩田さん。どちらかという自分の意見を話すよりも、本を読んだり静かにものを考えたりすることが好きだったので、清華大学外国語学部で教鞭をとる道を選びました。

清華大学外国語学部では、吸収の速い優秀な学生たちに教える楽しさを感じながら充実した生活を送りました。その後、日本人と結婚し来日。すぐに子どもに恵まれ、11年間家庭に入りました。その間、研究者である夫の支えもあり、研究を続けてきました。

「子どもたちの昼寝の間に原稿を書き続けたのですが、一人が寝付くと一人が目覚ますなど苦労したことは、今となってはいい思い出となっています」この間に、9本の論文を書き上げました。「論文をまとめるには資料を集め、整理し、問題との関わりについて考察するなど下調べが必要なので、大変な作業です。しかし、研究を続けていくうちに、研究の楽しさを覚え、やめられなくなるんです」と楽しそうに思い出を語る岩田さん。

これまで、マレーシアにおける企業経営行動のエスニック別比較分析のほか、現代中国企業の実情を踏まえ、その後の経営環境を分析し、中国企業の急速な発展についてまとめるなどの仕事をしていました。

中国人女性の活躍に刺激を受けて

その後、日本の研究グループの中国調査に同行し、通訳として調査に協力したとき、このグループのリーダーとして活躍している中国人女性の姿を見て、「自分もこんなふうに活躍したい」と大いに刺激され、2001年に、二人目のお子さんが小学1年生になったのを機に名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程に入学、もう一度勉強し直すことに。名古屋大学大学院時代の指導教官岸田民樹先生は、個人の休息時間を削って院生の研究を指導するという大変熱心な方でしたので、奇志さんはいつも教育熱心な先生に心底感動し、留学生が頑張っている姿を見て、元気がわいてきたと言います。そして2004年に経済学博士号を取得。

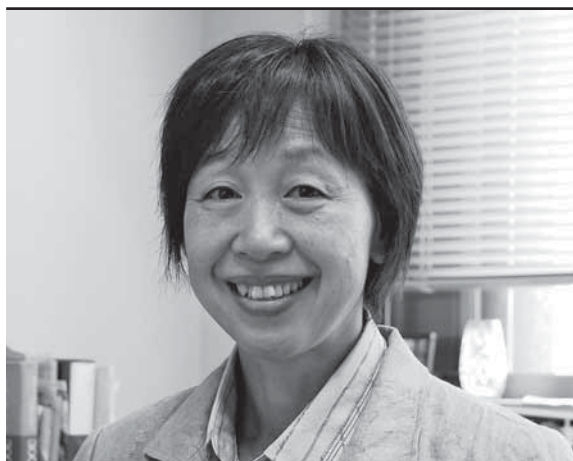
「研究という仕事は、精神的余裕と時間的余裕をもって常に気持ちを研究に集中しないとできません。結婚・出産・育児と研究生活の両立は本当に大変なことであり、強い忍耐力が必要です。また、夫をはじめ家族の理解と協力は欠かせません。後輩にアドバイスするとしたら、先のことをあまりくよくよ考えずに、焦らず毎日確実に、そして少しずつ研究課題を進めることを強調したいと思っています」。



赤門の前で

初心を忘るべからず、焦らず確実に少しずつ。

やりたいことは、
だんだん見えてくる。



留学生センター

講師 **マスデン眞理子**さん

Masden Mariko

●プロフィール

- 1982年 学習院大学英米文学科卒業後、茨城県の県立高校で4年間英語教諭として勤務。(～86)
- 1989年 アメリカ合衆国のイリノイ大学で英語教授法の修士号取得。メイン州のボーティン大学アジア学科専任講師として日本語を教える。(～91)
- 1993年 熊本大学文学部助手
- 1995年 熊本大学留学生センター講師として、留学生相談および日本語教育を担当する。

留学生センターでの仕事

熊本大学には約300名の留学生が学んでいます。留学生センターでは留学生のための日本語教育や相談の他、日本人学生を対象に海外留学の相談を受けています。博士課程の留学生は既婚者も多く家族とともに暮らす人もいます。これらの留学生が安心して生活できるよう地域と連携しながら環境を整えることも、マスデンさんの仕事のひとつです。

アメリカ留学が人生の転機

マスデンさんは留学生と関わる日常ですが、学習院大学で英米文学を専攻していた20代のころ、遠く離れた外国に憧れを抱いていたものの、自分とは無縁のことだと思っていました。卒業後これといった職業意識もないままに、故郷の茨城の県立高校で英語教諭をしていた時、アメリカ人の英語指導助手と友達になりました。外国人と同じ目線で語り合うなかで、初めて彼らの国を身近に感じるようになり、次第にアメリカの大学院で英語教授法を勉強してみたいという思いが強くなりました。当時はアメリカでの生活費も授業料も高く、その資金をどうするかが一番の問題でしたが、日本語学科で助手ができれば授業料が免除になり、お給料も出るというので、イリノイ大学を選びました。

可能性は自分が決める

大学時代には想像もしなかった留学ができたのは、このアメリカ人の友達との出会いでした。あるときその友達が、“He can do it. I can do it!”と言うのを聞き、自分の可能性はここまで思い込んでいた自分の天井に風穴があいたような気がしました。自分にはできないという思いは、自分の心が決めたことだったんだ、それならできると思えば、道は開けるかもしれないと感じ、留学への一步を踏み出しました。周りでは、今の安定した職を捨てて将来の当てもないことをするのは無謀だと、心配する人が少なくありませんでした。「今になって考えると、女性だからしたいことができたのかもしれないね。男性の方がしがらみが大きいでしょうね。」

足りない部分は助けてもらう

こうして飛び込んだアメリカで修士号をとり、アメリカの大学で日本語を教え、イリノイ大学で知り合ったアメリカ人と結婚しました。その後、ご主人が熊本学園大学の職を得たのを機に16年前に熊本に移り住みました。マスデンさんはこれまでの人生を振り返り、「自分の人生がこのような展開をするなんて、大学出たての頃には想いもしなかったことです。今の学生は3年生から就職活動をし、将来についてしっかりしたビジョンを持っているようですが、それに比べると私はなんとも行き当たりばったりで恥ずかしいのですが、先の先まで心配すると何もできなくなってしまうがち。能力の足りない部分は、いろいろな局面で出会えた人たちに助けられました」と笑う。

留学に負けず劣らず、子育てでも悪戦苦闘しつつも学びの場となっています。大切な経験ですが、仕事との両立に悩むことも多々あったといいます。「特に子どもが小さいときは100%仕事に専念することができず、仕事も家事も育児もぜんぶ中途半端で自信をなくしていました。そんな時、友達に『仕事と家事と育児を全部足せば100%超えるよ』と冗談まじりに励ましてもらい、細々とではありますが仕事を続けることができたのだと感じます。」

あ と が き

女性研究者の層を厚くし、優秀な女性研究者が活躍できる環境が実現するか否かは、将来の熊本大学の研究活動のポテンシャルを大きく左右する問題です。多くの女子学生たちが、研究者を志望し、その道にチャレンジしていくような機運の醸成と、情報提供、啓発を積極的に進め、成果ある事業展開を推進してまいりました。

そのひとつとして、今回ロールモデル誌に取りかかりました。事業を遂行するにあたって目標を掲げたことは、絶対に女性研究者の3割の方にご協力をいただきたいと願ったことです。結果は、超多忙な中から参加いただいた41名（33.8%）の女性研究者のロールモデル誌となりました。女性学生のみならず中・高生の女性徒にとって学部を選考していく道しるべとなる貴重な1冊となることでしょう。

今後も、課題達成のために全力で推進を図ってまいります。皆々様の更なるご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

熊本大学 男女共同参画コーディネーター 緒方 洋子

熊本大学は、本気で頑張るあなたを応援します。

熊本大学女性研究者ロールモデル

平成20年11月 発行

編集・発行 熊本大学 男女共同参画推進室
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号
TEL・FAX (096) 342-3281
URL <http://gender.kumamoto-u.ac.jp/>

印刷・製本 株式会社 トライ
〒861-0105 鹿本郡植木町味取373番1号

本書の無断転載を禁じます。



ほくも
家事に子育て
頑張るよ

もう諦めなくていいんです。

せっかく続けてきた仕事や研究を
どうしてもやめたくない。
でも、結婚したら家族も大切にしたい。
家事も、子育てもやっていきたい。
熊本大学なら、私だって
それができるのね！